

1999年下半期報告書 1999.10～2000.3

大学山岳部は極道？

一橋大学一橋山岳部

巻頭言

生きる人生を楽しみ楽しむ人生を生きる (なんじゃって) ; 誰かのサイン

メキシカン田中です。いまメキシコ人になるために、きたないひげをのばしています。最近宗像さんに会ってもしかとされます。でも、もう海外に高飛びするから、関係ないよ～ん。

宗像です。

上の方と字が似ているのは気のせいです。

4月から田中が取りあってくれません。山田少年は最近ごう慢です。

自分は山が好きなのか、どうかよく聞かれます。

あまり深く考えたこともありませんが、結論はあまり出ません。

ということは多分、好きではないのかもしれない。

山で嫌いなもの、

山で一番経験したこと

- | | |
|---------|---------|
| 1. ラッセル | 1. ラッセル |
| 2. ヤブこぎ | 2. ヤブこぎ |
| 3. 林道歩き | 3. 林道歩き |

組織運営なんか嫌いなのに、リーダー3年もやった

矛盾だらけの山岳部5年間と、やっとおさらばできそう。

<目次>

巻頭言

序

| | | |
|----------|--|-------|
| 10/17～19 | 冬偵・個山 抜戸岳取りつき・錫丈岳前衛フェース銀河鉄道 (敗退)、 左方カンテ | 2～3 |
| 10/24・25 | 個人山行 北アルプス常念・蝶 | 4 |
| 11/27・28 | ボッカ山行 両神山ボッカ訓練 | 4 |
| 12/3～5 | 雪訓 富士山合同雪訓 | 6 |
| 1/16・17 | 個人山行 上州武尊山 | 7 |
| 1/29～2/3 | 個人山行 八ヶ岳赤岳鉦泉定着 | 8～9 |
| 2/7～12 | 個人山行 北岳バットレス四尾根主稜 | 10～15 |
| 2/17～23 | 個人山行 上越国境・平標～谷川 | |
| 16～17 | | |

| | | | |
|---------|------------|----------------|-------|
| 2/25・26 | 個人山行 | 西伊豆波勝崎海金剛 | 18～20 |
| 3/4～11 | 個人山行 | 九州クライミングツアーと帰省 | |
| | | 21～28 | |
| 3/17～21 | 春合宿 | 抜戸岳南尾根～笠ヶ岳 | |
| | | 29～33 | |
| | その他の個人山行 | | |
| | | 33 | |
| | 中止になった山行たち | | 34 |
| | 新人紹介 | | 34 |
| | フリートーク | 山田 | 5 |
| | フリートーク | 宗像 | 35～38 |
| | 編集後記 | | 38 |

====序====

ほとんどの大学山岳部もそうだと思いますが、一橋山岳部も例外なく部員数の減少、4,5年生の卒業で、とうとう今年は2年の山田が1人だけになってしまいました。ただ、不幸中の幸いといえましょうか、今春卒業した二人とも大学院に行っていて、身近にいたので色々相談を受けてもらっていることは大変助かっております。今年の新入部員も今のところ留学生の Zorig 一人だけと寂しい限りの状態ではありますが、今年は来年のためのステップ期間と捉えてまずは体力をつけていこうと思います。

こうも部員が少なくパートナーにも事欠くような有り様なので、OB・他大学の皆様には何かと迷惑をかけてしまうかもしれませんが、その時はご容赦をいただくようお願いします。

2000 年度一橋山岳部 主将 山田秀明

1. 冬山偵察・個人山行

<抜戸岳取りつき・錫杖岳前衛フェース銀河鉄道 (敗退)、左方カンテ>

参加メンバー：宗像／長岡 (関西学院大学山岳部 5年)

10/17 (晴れ)

ようやく大学院の試験が終わり、そのあと卒論の中間発表を終え、2ヶ月ぶりに山に向かう。今回は冬に予定してある関西学院大学との合同合宿に備え、抜戸岳南尾根の取りつきの偵察と、錫杖でのエンジョイクライミングを予定して、計画には4本くらい登るつもりで出発したが、そんなことはできるはずもなく、結果的に一本しか登らなかった。

前日、平湯温泉の障害者用のトイレに泊まったが、夜中におばちゃんに起こされて、外に出

されてむちゃくちゃ不快。どっかで買えるだろうと、夕食の準備をしてこなかったが、案の定、どこでも買えなかった。長岡は季節運行のバスがなく、新穂高での集合が遅くなった。気を取りなおして偵察に向かう。出発してすぐ宗像がカメラを忘れたことに気づき、引き返す。さらに 10 分後、長岡がコンパスを忘れたことに気づき、取りに戻る。ばか二人。相変わらずこの二人で山に登ると間抜けだが、その理由は二人とも間抜けだからだ、ということがわかっている程度には間抜けではないようだ。

地形図を確認しつつ林道をたどり、取りつきのクサコバというルンゼを確認。右のほうのガレたルンゼを詰めて登るが、途中から藪になり、左のほうにトラバースすると歩きやすいルンゼが見え、上のほうはいかにもクサコバ。少し登ると稜線が見えることを確認して、写真を撮り、偵察を終了とする。このルンゼは下の林道まで歩きやすいので、ルンゼの入り口に赤布をつけ、新穂高に戻る。

夕食の準備はしていないので、仕方なしに栃尾までバスで戻ること。三分で買い物を済ませれば、体よく乗れるはずで走ったが、どだい無理な話だった。バスは 1 時間後なので、少しでもバス賃を浮かせるために、三つ先のバス停まで、スーパーの袋を持って歩いた。ヒッチハイクを試みるも、観光地なので無理。槍見では長岡は、混浴の露天風呂でご満悦だったようだ。

重い。軽量化など大量のギアと多すぎる食料、意味のない酒に遅々として進まず、錫杖沢の出合いまで 1.5 時間。先週来た上智の太田が岩舎がいいといていたので、錫杖沢を詰める。が、巻いたところで道を間違え、いけどもいけども藪が濃くなるだけで、暗くもなってくる。お互いにそれから、太田にも心の中で考えられる限りの罵詈雑言を浴びせ、いらいらは募る。岩舎は通り過ぎてたようで、暗くなった中、暗くなった沢を戻り、ようやく BC 着、多すぎる食料をお互い無言で食う。

10/18 (曇り)

5:30BC 発—7:30BC 着

銀河鉄道のハングは目立つので良くわかる。

1P 宗像リード。岐阜登高会の残置ピトンを拾いながら、途中、クラックはネイリングとフレンズのかけかえで、その上は右にまわりこみ、草付きの不快なところを左に上がり返すと、ペツルが打ってある。長岡のクリーニングは、慣れていないから時間がやたらかかった。

2P 長岡。テラスからクラック沿いにハングしたのテラスまで。アメリカンエイドが初めての長岡は、フレンズを選ぶのに時間がかかっていた。小さ目のカムが良く決まる。途中ピトンが抜けてテンション。最後に右に軽くトラバースしてテラス。ビレー中自然落石があり、非常に肝を冷やした。この岩場は結構もろい部分がある。

3P 宗像。ナイフブレードを打ち込んでしまる。その上、バカブーのタイオフ。さらに、ロストアローを打ち込み、その上のクラックに小さ目のフレンズをセットして乗り込んだところで、クラックがエキスパンドして 2m フォールフォール。登り返そうとしたが、ロスト

アローが半分抜けかけで、その上にまたセットすると今度はロストアローまで抜けそうで、またナイフブレードも足りそうにないので、リスクが高すぎると判断。敗退決定。アブミかけかえで下りたため、残置物はなし。取り付きまで、ダブルの懸垂一回で下りる。

まだ時間が有るので、左方カンテに転戦する。

1P 左端のルンゼを登る。3級だが、ロープは出さなかった。

2P 長岡リード。以降スタカット。ルンゼがたってきたのでロープを出す。ピナクルのあるテラスで終了。

3P ピナクルの脇からのボルト連打を右に上がる。「日本の岩場」では A1 なので人工で登ったが

最近のルート図ではフリーになっていることが後からわかった。また、フリーでも登れそうではあった。

4p 結構傾斜のあるルンゼを内面登攀。フォローはザックがあるので、苦勞した。

5p テラス正面右のクラックから左のフェース。再びルンゼとなり、左の藪ったところを登って、再びテラス。

6P オフuzzスとのことだったが、良く覚えていない。下がない岩峰の間を内面登攀で登る。

7P 長岡が足が痛いとのことで、再び宗像。はがれそうなフレイクをたどって、最後のほうは草付きで不快。

終了点は藪の中で、登った気がしなかったので、下降点も探す意味もあって、一人で頂上を目指したが、面倒くさくなって途中でやめて、同ルート下降にした。ガスも出ていた。ヘッドンをつけての空中懸垂はかなりスリリング。下のほうはロープが絡まってやになってくる。その上、爪を切ってなかったから、右足の爪が浮いてしまった。

真っ暗な中、BCに戻り、多すぎる飯に再び無言になり、何も片付けずに寝付く。

10/19 (晴れ)

今日登るつもりだったが、二人とも足を悪くしたから、下山する。多すぎる朝飯に三たび無言になり、再び重荷を背負って下山。錫杖沢はそのまま下ればよい。槍見で風呂に入って、砂防博物館の愉快なおじさんの解説を楽しみ、露天風呂を上から眺め、バスがくるまで時間をつぶす。それにしてもこのおじさんの仕事はなんなんだろう。

文責：宗像充

2. 10月 北ア 三俣—常念—蝶ヶ岳—徳沢—上高地

参加メンバー：田中（4年）、山田（1年）、久富（一橋 WV5）、渡辺（一橋 WV3）

19月23日

急行アルプスで豊科駅まで。タクシーで、三俣口まで。良い天気。前常念から常念を越えて

蝶ヶ岳ヒュッテまで歩く。テント泊の人達も割りと多かった。

24日

蝶から、徳沢へ、上高地へ。一泊二日の秋の良い山行だった。

文責:田中

真之

3. 両神山ボッカ訓練 1999/12/27・28

参加メンバー CL 田中 (4年)・SL 山田 (1年)

1日目 (晴れ)

11:00 日向大谷口～11:20 日向大谷 11:40～12:10 会所 12:25～13:40 清滝小屋△

ボッカ訓練で行くのなら百名山に行こうということで、埼玉県の両神山に行く。ボッカ訓練ということで、ザックの重量は約30kgほど(主に水とダンベル)にして登る。朝、7時所沢発でやっと11時に取り付く。そのため、わずか3時間ほどの行動となる。だが久しぶりの重荷であったため、ちょっと疲れた。さすが百名山ということもあり小屋にはこの時期にも人がいる。落ち葉がうれしい秋の出来事だった。

2日目 (晴れ)

7:00△～両神神社 7:50～8:10 頂上 8:25～9:45 大峠 10:15～11:05 白井差

やはり11月下旬ともなると夜は寒い。頂上へと向かう。小屋からずっと登り、いくつかの鎖場を抜けると、頂上だった。この日は快晴で雲取山どころか富士山まで見ることができた。ここから中双里に下りる予定であったが、どうやら昨日、田中が小屋のほうで足を捻っただけ。そのため大事を取ってエスケープ。大峠から中双里には向かわず、左に曲がって白井差の方へと下りる。順調に下りて、午前中に林道に出てしまった。が、バスはあと2時間待たねば来ないということで、ヒッチハイク。小森バス停まで乗っけてもらう。車さえ持っていれば日帰りでいける山なのに・・・ということを実感する山であった。

(山田秀明)

<フリートーク>

いたずらな虫歯 2000春

去年も丁度、2月の受験の頃だった。そう、左下の虫歯を治療したのは。

そして今年、2月の谷川岳の肩の小屋で、再び私の左下の歯が痛み出した。小屋とはいえ、室温はマイナス5℃。外で風がビュンビュン吹くたびに、まるで痛風のように歯がキシキシと音を立てて痛み出し、沈没で唯一の楽しみである食事も、満足にできず憂鬱な気分させる。山を下りたら絶対に歯医者に行き治療するぞ、と心に誓うがまだ初期の頃だったせいか、下界に下りるとまったく痛みがなくなる。単純な私は「良かった～。治った～」と思って結局、歯医者に行かなかった。

それから、春合宿。東京の春に歯も調子が良く気分は爽快のはずだったが、やはりアルプスの春は東京と比べて寒かった。気温の低さにまたもや歯が痛み出した。どうやら治っていなかったみたいだ。毎日バッファリンを飲んで何とか痛みを凌ぎながら、今度こそ下山したら歯医者に行くぞと決心する。が、またもや松本に降り立つといつの間にやら痛みがなくなり、あの決心もいつの間にやら歯の痛みとともにどこかに消え去った。

東京の春はやはり暖かかった。毎日の生活の上でまったく支障がない。しかし、GW 合宿で再びアルプスに行ってしまうと以来、再び歯の痛みは再発、東京の生活にも支障をきたすよいになった。テレビで見るように本当に左の頬にずっと手を当てていなければ落ち着かないようになったので、慌てて歯医者に顔を出し、6月9日午前9時58分やっと治療終了。この瞬間にやっと私の2000年の春は終わった

結論・・・歯は自然には治らない。痛みがなくなっても歯医者に行くべし。

(文責 : 山田秀明)

4. 富士山一橋、関学合同雪上訓練

参加メンバー：CL宗像(一橋5年)、SL長岡(関学5年)、砂永(関学4年)、森(関学2年)、山田(一橋1年) / 古田(一橋OB)

12月3日

7:00 立川～10:50 馬返し～にせ五合～13:45 テント設営完了～14:00 BC 発(6合目付近で雪上訓練)～15:45 BC 着

立川で関学の皆さんと合流して富士吉田へ。5人もいるのでちょっと狭いけど、タクシー利用にもってこい。佐藤小屋の下の上智大のテントの隣にテントを張って、さっそく雪訓して6合目に上がったが、あまり雪がなくピッケルストップ出来る状態になく、しかも山田は新調したプラ靴にアイゼンのサイズを合わせるのを怠っていたため、ちょっとアイゼン歩行を練習しただけですぐにタイムアップ。

12月4日晴風中くらい

7:05 BC 発～8:40 七合目付近(雪上訓練)～ビバーク地点～17:30 ビバーク準備完了

もう少し上に登って、今日は7合目にて雪訓。アイゼン歩行、ピッケルストップ、耐風姿勢、スタカットと順調にメニューをこなしていたが、隣で訓練していた上智の坂道ダッシュノ厳しさと自己脱出ノ時にあまりの衝撃の強さに宗像さんの雨具の背中側がロープの跡がクッキリと敗れていたのはとても印象的だった。ピッケルストップのときに合流した古田さんとともに7合目でビバーク訓練して1日が終わる。

12月5日 曇り 風強し

4:30 起床～6:05 発～11:15 訓練終了～12:00 BC 着～13:20 BC 発～14:20 馬返し

宗像。古田さんの話だと、どうやら今年の富士山は暖かかったらしい。私はあまり眠れなかったが。我々は富士山山頂を目指して登り始めたが、古田さんは仕事の関係で下山。が、富

士山固有の風の強さが発揮して 8 合目過ぎたあたりで登頂を断念。下りは吉田大沢訓練と称してスタカットを 7 ピッチ程練習しながら下り、時折スタンディングアックスビレイの時の事故脱出をやる。7 合目に下りて、森さんを包んで搬送の練習もした。昨年とは違い、かなり時間に余裕を持って下山。

関西学院大長岡です。巻頭言と筆跡が似ているのは気のせいです。履修登録ミスで 6 年生やっています。長岡商店のお母さんごめんなさい。今、卒論かいてます。

でも、最近スッチーとつきあい始めました。24 才です。16 才女子高生とか、34 才 OL とか、いろいろ試してみましたが、この辺で腰を落ちつけない。早く結婚して山やめたい・・・今日この頃。宗像と山に行くのも疲れます。蟻の巣ころりをしかけて地獄に落ちないか心配です。蟻さんごめんなさい。

5. 上州武尊山 2000/01/16～/17

16 日 (◎)

10:00 上の原山の家～13:15 コル～15:50 藤原岳手前付近 T S

水上駅から上の原山の家までタクシーを使う。約 6000 円。登山口では雑誌のスノーボードの写真撮影をしていた。ワカンなしで登り始めようとしたが、ほんの 3 歩ほどで挫折。ワカンをはいて登るも最初の 1 ピッチはクロスカントリーのコースの様な感じでワカンよりもスキーのほうがよかったとおもうようなところ。稜線に出るまで赤布はほとんどなかったが、ほんの少しだけ残るトレースについて膝までのラッセル。稜線に出ると標識がちらほらと「残り 0.0 Km」と教えてくれる。が、ラッセルがなくなるわけでもなく依然とワカンをつけ黙々と進む。途中の避難小屋は雪で埋もれていた。その避難小屋から歩いて 30 分ほどの所に幕営。本日の宗像へのラッセル依存度 90%。

17 日 (◎のち○)

6:50 TS～8:10 藤原岳～沖武尊～11:00 家の串～11:45 剣が峰～12:25 前武尊～13:50 オグナほたかスキー場ゲストハウス

最初からワカンをつけ歩く。TS から約 1 時間ほどで藤原岳につき、ここから家の串まではアイゼンをつけて登る。家の串まで又ワカンに履き替え、剣が峰前まで又アイゼンにする。剣が峰はこの山行で唯一の岩場であったが天気が良く、また鎖がついていたのでロープを出さずに通り過ぎた。剣が峰を降りたところでまたワカンに履き替え、目の前の前武尊に行く。前武尊には大和武尊の銅像らしき尾瀬のほうを指差して建っている。何か場違い的なものを感じながらスキー場へと降りる。やっとのことでリフトの頂上に着き、リフトで下らせてもらえないかと頼むも。「今日は休日だから」と断られる。平日なら乗せてくれるらしい。そのため鬱々としながらスキー場を 1 時間かけて歩いて下った。本日の宗像へのラッセル依存度 100%。

これからがんばろう。

(山田秀明)

6. 個人山行<八ヶ岳赤岳鉱泉定着>

1/29~2/3

参加メンバー：宗像／長岡・森・砂川（関西学院山岳部）

今回の山行は僕が冬合宿をキャンセルしたときに、関学の奴隷になると宣言したために、僕の意味とは関係なく参加することになった山行です。（関学では合宿）しかし、いつもの気心の知れたメンバーでもあったため、自分に課題も設定でき、充実しました。

1 日目

茅野で寝ていると、関学の連中がやってきて、関学の OB の車で美濃戸口まで運んでもらった。四年前にもいたが、今回も韓国人パーティーと一緒に入山となった。今日はワングルからトラバークした砂川君の雪上訓練のため、ジョーゴ沢の斜面にフィックスを張って、歩行練習をする。歩行練習だから、楽しいはずもないが、奴隷なので文句をいうこともできない。新しいアックスを試してみたいのに。今日は日本山岳会のアイスクライミング講習会があり、夜は赤岳鉱泉で机上講習をやっているということなので、用もないのに顔を出し、ご相伴にあずかった。

2 日目<赤岳主稜～大同心大滝>

今日は、みんなで赤岳主稜。途中、中山乗越の手前、直登の道と、つづら折りの道が分かれているので、直登の宗像・砂川組と、長岡・森組で競争することにした。ターミネーター並に体力のある砂川君のおかげで、楽々先着。隠れて待っていると、長岡・森がやってきて、「口ほどにもねーなー」とか、口ほどにもないことを食っちゃべっているのを出ていくと、長岡一言「むちゃくちゃ感じわるいわ」。主稜は宗像・森・長岡・砂川でパーティーを組んだ。取り付きはルンゼのところから取り付いたが、1P 登ったところで、自分が偵察に来たときのトレースを見つけ、ここは右からノーロープでこれるらしい。特に問題となるようなところもないが、途中、多分核心部で、先行する長岡・砂川をかわすため、右にトラバースしてリードしたが、石が浮いていて、少し緊張した。森もしっかり登っているのでスタカットでさくさく行くが、僕も長岡も記憶があいまいで、ムダに時間を食った気がする。今日は天気がいいのでどこの山も良く見えるが、どの山もいっしょに見える。トレースの消えた地蔵尾根を慎重にたどり、BC へ。

まだ、時間的に余裕があるので、ちびたアイゼンを、森の新しいシャルレに代えてもらって、長岡と大同心大滝を登ることにした。ちなみに、通算四回目、今シーズン初アイス。大滝までトレースはなく、ラッセル繰り返す。大滝を見るのは初めてだが、写真より発達していない気がした。滝は 2 段になっていて、上部は左の凹角状になったところを 6,7 本スクリュエをねじ込み、アックスステンションしまくりで何とかリード。右手の RB のトルネードは良く

きまるが、左手のクエーサーコンパクトは、最後のほうは力なくなってなかなか刺さってくれなかった。長岡は、途中で腕力がなくなり、無残にも途中敗退。暗くもなって来ていた。懸垂で下りて BC に戻る。あの無駄な筋肉は何に使ってるんだ。
結論、アイスは度胸。

三日目<大同心雲稜ルート>

今日は、森と雲稜に向かう。長岡と砂川は南稜。取り付きで、森のギアが目立って少ない事に気づくが、長岡たちはいなくなったので、何とかカラビナを工面して、登り始める。

1P 目 雪はまったくと言っていいほど付いていない。最初、ピンが見つからず、緊張する。エイドに移るところが微妙で、また、ラダーの間隔も遠くて、フォローの森が苦勞していた。この時点で、登る前は景気がよかった森の士気が極めて落ち、以後、ずっと宗像リード。

2P 目 良く覚えていない。

3P 目 ルート図では、フリーのピッチになっているが、基本的に人工。

4P 目 III 級とはいえずとも思えず、ピナクル下が悪く、アックスを駆使して登る。人工も入る。

5P 目 人工だがドライツリーリングも交えて A0 で。アンカー下が良くなかった。

6p 目 簡単そうなので、森にトラバースしてもらおう。ドームを登る長岡が見え、声をかけるが浮かない返事。

フォローしてドームノ基部まで行くと、なぜかさっき登って多はずの長岡が、砂川と二人ニヤニヤして出迎えてくれた。なんで? と思ってドームを見上げると、切れたロープが垂れている。聞くとところによると、抜け口のところでスカイフックをかけていた岩がかけ、20M 落ちたらしい。そのとき岩角にかかったロープが 1 本切れた。よく無傷でいたことだ。風になびくロープを見上げてあんまりいい気分はしなかったが、長岡とロープを組んでリードすることにする。森と砂川は、ドームを巻いて先に稜線から帰らせた。何のことはないアブリのかけかえに終始するが、抜け口のところは多分ピンが抜けたのか、確かに間隔が遠くなっている。アックスで A0 を使えば問題なかったろう。ドームの頭で無線交信すると、まだ森たちは硫黄岳にいた。夕闇が迫る中、僕らも稜線から帰る。硫黄のところで予想通り暗くなり、ヘッドランプを出して下る。こう言う雪山もたまにはいい気分がするが、毎日残業だな。砂川の準備した夕食はグッドだが量多すぎ。

四日目

針葉樹会の新年会があるので一人先に帰る。森は風邪を引いて、長岡、砂川で中山尾根に行っていた。

文責：宗像

7. 個人山行<北岳バットレス四尾根主稜>

以下長岡の寄稿に若干の訂正を加え報告に代えます。

- 1、日時 2000 年 2 月 7 日（月）～12 日（土）
- 2、ルート 池山吊尾根～北岳バットレス第 4 尾根～北岳ピーク～池山吊尾根～下山
- 3、メンバー CL 宗像充（一橋大 5 年）、長岡正敏（関西学院大文 5）
- 4、結果 計画の中央稜継続は割愛。第 4 尾根を登攀ビバークを経て登頂。
計画上の中央稜登攀は割愛。
- 5、行動記録

2 月 7 日（月） 晴れ

12:10 夜叉神発～14:20 鷲の住山～16:10 隧道～池山吊尾根取り付き TS

朝国立を出て、甲府へ。やけに気さくないかした運ちゃんに、愉快的トークを聞きながら昼前に夜叉神へ。適当に身支度をして出発。深沢下降点は、ルートに自信がなく却下。鷲ノ住山から夏道通り下降する事にする。鷲ノ住山への分岐でプラ靴に履き替える。ここで宗像、プラ靴のシェルの中敷きがないことに気付く。差し当たって問題がないので山行は続行。」しかし、この下降路、荒廃していて滅法悪い。途中岩場もあって、なかなか怖い。

30 分ほど、下降した挙句発電所着。橋を渡って林道に登り返す。この登り返す道も、橋が壊れたりする。

隧道は、真っ暗なうえ、路面が平でなく怖い。ヘッドラを出すべきだった。

池山吊尾根取り付きの路上で幕営。

夜、中敷きがないと足が冷たいと、宗像テントマットを切って、中敷きを作る。

8 日（火） 雪

6:45 出発～10:55 池山御池小屋～15:55 TS

池山吊尾根に登り始める。トレースは無い。下部は藪の中を、踏み跡を慎重にたどっていく。

やたらに、マーカーや赤布が目につく。親切な方もいるものだ。

高度を上げる毎に雪の量は増し、ラッセルはきつくなる。休憩の度に、宗像は現在地を地形図から割り出すが、表情は暗くなる一方。長岡は意識的に地形図を見ないようにする。

それでも長岡、希望的観測を持って、急登を一気にラッセルし、当てが外れて撃沈。予定では、BC 迄今日中に上がるつもりだったが、結局、小屋から 3 時間程ラッセルしたところで時間切れ。樹林帯で幕営。

天気は下り坂だ。

9 日（水） 曇り 9:30 出発～ポーコン沢の頭～14:30 八本歯の頭～15:00 BC 設営

朝、やたらに風が強い。積雪もあり、どうせ今日は BC 迄とたかをくくり、遅出する。

今日も出だしからラッセル。しばらくいくと腿上迄のラッセルになったので、ダブルボッカで進む。昨日頑張りすぎたのか、長岡冴えず。

ボーコン沢の頭の上になると、バットレスが見え始める。身震いがする。八本歯の手前のコルまで進み、空荷で頭まで偵察に行く。取り付き迄のルート取りに見当をつけ、コルまで戻り BC 設営。バットレスを見渡す、絶好のロケーションだ。富士山もよく見える。

10 日 (木) 快晴 「宗像充人生最悪の一日」 (by 宗像)

4:00 出発～4:20 八本歯のコル～7:00 第 4 尾根～12:00 第 4 尾根 1 目取り付き～17:00 マッチ箱～19:00 夏季登攀終了点

2 時起床。緊張しているのか、張り切り過ぎているのかよくわからないが、余りよく眠れなかった。長岡の不注意で水を 1 リットル凍らせてしまい、朝から水作り。間抜けな話だ。ヘッドラをつけ、八本歯をガツガツ進む。コルの広河原への分岐にて、弱層テストをする。入山以来、まとまった積雪もなく、雪質は安定していると言えそうだ。

分岐から、広河原方面にしばらく下降。弱層テストの結果は悪くないとはいえ、気持ちの良いものではない。100m 程下った所からトラバース開始。トレースはなく、いわゆるがなのドラッセルだ。

途中、長岡が藪に左目を突かれコンタクトを落とす。しばらく右目がかすむが、大勢に影響はなく続行。しかし、尾根を二つほど越えた辺りで宗像がヘッドラを落とす。これは大勢に影響がある。宗像は私のヘッドラを持って、50m ほど追うが結局見つからない。二人仲よくションボリする。結局、この時点で、中央稜への継続は割愛し、日のある内に 4 尾根を抜ける事とし、続行。ラッセルを繰り返し 4 尾根を目指す、上からちり雪崩が何度か落ちて来て、非常に気持ちが悪い。速攻で抜ける。d ガリー大滝上に出て、トラバースバンドを伝い、一回懸垂をして c ガリー側に回り込む。

そこから、無雪期ルート経験者の宗像のオボロゲな記憶を頼りに、宗像がリードで取り付くが、滅法悪い。アンカーもまともに取れず、ビレイする側にもかなりの緊張を強いられる。5m 程クラックを登り、フレンズをかましてレストするが、あっさりフレンズは抜け、宗像フォール。声をかけても返事が無く焦るが、恥ずかしそうに笑うバカ面がみえひとまず安心。腿を軽く打ったくらいで怪我も無いという。運のいい奴だ。長岡も、見事な制動確保で良く止めたと自画自賛を忘れない。宗像は、上にピッケルを置いてきたという。器用な奴だ。そこからの登攀はあきらめ、長岡がロープ等の回収を行う間、宗像が偵察に行く。ロープ回収後、トレースを追い c ガリーのルンゼに入る。そこから何故かトレースが消えており戸惑うが、結局ルンゼを遮るようにある、3m ほどのホールドの細かいスラブを登る。落ちても問題のなかったところだとはいえ、なかなか微妙なバランスを強いられた。考えられる限りの悪態をつきながらクリア。すでにピッケルを回収した宗像と合流。そこから登攀開始とする。1p 目は長岡リードでリッジ上をいく。3 級くらいの岩場で差し当たって問題はなかったが、どん詰まりが、異常に立った壁で、上部は思い切りかぶっている。残置ピトンはあるが、どう見てもエイドルートだ。それを見て呆然とするが、とりあえずレッジでピッチを切る。

2p 目は宗像リード。レッジから 2m ほどクライムダウンし、右に 5m トラバース。そこから凹角を目指し左上。上部はブッシュ混じりの凹角を抜けビレイ点。凹角に入る辺りで、宗像ひどく苦勞している。セカンド長岡は、トップの苦勞から学習し、一回右上してから凹角に入るという作戦でクリア。

この 2P 目で無雪期の 1p 目とと合流。

以降、つるべで登攀。

3p 目は 10m 程右上するように緩傾斜の雪壁登りの後、岩稜、そして左上し再び雪壁。

4p 目は、中途半端に雪の乗ったフェースを直上後、右へトラバース。稜上に出てテラスへ。雪の付き方は悪く、アイゼンが下の岩に当たる。こといって、雪を全部落とすとまた登りにくい。残った雪の斜面に、体重をだましまし登ると言ったデリケートな登攀となる。宗像ひどく時間がかかる。特に、トラバースの辺りでは相当苦戦しているようだ。挙句の果てにピトンを落とす。落ちたピトンは、ビレイする私の横をすり抜け、遥か下まで落ちていく……。セカンド長岡は、またもや学習し、トラバースの出だしの辺りで残置ピトンを発見。それにバイルのピックを引っ掛け AO し、クラック沿いにドライツールングで直上、宗像のとったルートより一段上をこれまたドライツールングで快適にトラバースする。テラスに上がる手前で、何故か残置してある（落としたの？）宗像のバイルを回収する。

4p 目は“白い岩のクラック”雪に覆われ、何が白くて、どこがクラックなのかまったくわからない。先程のピッチで、宗像が味わった苦澁を、長岡もまたここで堪能するハメになる。雪を掻き落としながらの慎重な不快な登攀となる。おまけにランナウトしまくりだ。前爪もカチッと決まらずハンドホールドも細かい。手頃なハンドホールド見つからず、慎重にドライツールングで登っていく。重圧のあまりヤケを起こして、バイルを、刺さるかどうか分からないような雪面に叩きこんでやりたくなる気持ちを必死に押さえながら、時間をかけて登る。フォロー宗像は、サクッと登ってきた。どうも冬壁とはそんな物らしい。

5p 目は簡単な雪稜となり、無雪期の核心、5m の垂壁前のビレイ点につく。垂壁は雪に埋まり 2m 位しかない。醜悪なまでにピトンが乱打されている。

6p 目は本来長岡リードだが、マッチ箱の懸垂支点が見付け難い、ということで無雪期経験者の宗像にリードを代わってもらう。宗像、出だしの垂壁で苦戦し、見ている長岡までブルーになる。その後は稜上は、ひどく雪の状態が悪い。おまけに支点がほとんど取れなく、かなり困難、かつ緊張を強いられる登攀となったようだ。

セカンド長岡は、果敢に垂壁にフリーで挑んだが、敗退。素直に AO のしまくりで登る。セカンドでも稜上はかなり困難に感じられた。おまけに上部は 15m はランナウトしている。確保点につくと、案の定宗像はやつれた顔をしている。そりゃそうだろう。マッチ箱から、掘り出した支点で懸垂。

言い時間だが、マッチ箱がコルが資料にあるような“ビバーク適地”“荷はとても思えない。とりあえず進む。

7p 目は本来途中から左のルンゼだが、何だか気持ちが悪く、右の稜上をそのまま行く。ハ

イ松だらけのレッジ上で確保。このピッチで日も落ち、あたりには夕闇が押し迫る。二人がレッジに揃った時には、とっぴり日も暮れ、夜になる。しかし、こんな所じゃビバーク出来ない。ヘッドラ落とした宗像に、長岡のヘッドラを渡し、次ンピッチは宗像リード。

8p 目は城塞の右から凹角に入りリッジ上に、リードする宗像も相当怖かったと思うが、闇の中、ビレイする方も相当怖い。この闇の中、“ロープがキンクしたら・・・” “” トップが落ちたら・・・”と考えると、脂汗が出る。緊張のあまり吐き気を催すが何とかこらえる。

良いアンカーが取れなく、落ちるなどの指令がある。ヘッドラを下すという考えもあったが、たった一つのヘッドラが壊れるのを恐れ、セカンドは月明かりのみの手探りで登る。幸い、ホールドも大きく楽に登れる。ただ、やはりランニングの回収には手間取り、癩癩を起しデポろうと思うが、良く見たら私の環付きビナだ。これはデポれない。

やっとのことで雪稜上に出て、無雪期登攀終了点につく。このまま行ってしまうかとも考えたが、ヘッドラが一つしかないこと、宗像の消耗が激しいことから、ここでビバークする。雪洞を掘るが、すぐに岩が出てしまい、雪面上の腰掛けビバークとなる。

ビバーク中も、宗像はなかなか回復せず、主に長岡が水や飲料、食事を作る。以前、好きだった子が風邪を引いた時、看病した事を思い出すが、今はビバーク中、相手は宗像、ここは北岳 3100m 付近、季節は厳冬期。あんまり嬉しくない。飲料を飲むと宗像も落ち着いて来て、取り敢えず安心する。普段は宗像の方が強いのだが、やはりこういう時は体重のある方が強いのだろうか。普段、アメ車、アメ車とバカにされていた分は取り返せそうだ。

ツェルトのレギュレーターから外を覗くと、甲府の街の灯りがよく見える。何だか変な気持だ。街はあんなに明るいのに、何故に私たちは、ここでこんな事をしているのだろう。

いきなり 1 年生をこんなところでビバークさせたら、すぐ辞めちまうんだろうな、なんて馬鹿な話をする。そりゃそうだ、私だって、以前にこんな所にビバークさせられていたら絶対辞めている。だけど、今は自ら望んでここにいる。不思議な話だ。

食事を終えると、宗像はすぐにイビキをかいて眠り始める。逆に長岡は、なかなか寝付かれない。やはり、宗像はタフな奴だ。

一日の記録をまとめながら、いろんな事を考える。山のみに限らない、今まで自分がしてきた事、今してる事、これからしたいと思っている事。遠い街の灯りが感傷的にさせるのだろうか。しかし、今我々がいる所は安全地帯ではない。今はそれらのことは雑念に過ぎない。それらを頭の内から追いやって、浅い眠りにつく。

11 日（金） 晴れのち雪

夜も明けきらぬうちに出発。頂上直下の岩壁まではひたすらラッセルだ。交代しながら進むが、かなりのアルバイトで、なかなか進まない。そのうち完全に日が登りきってしまう。ラッセルしていると足の下の方から、時折、バスッと嫌な音が聞こえてくる。どちらにせよ、登るしかない。しかし、ここでロープを出すかどうかの判断をしなかったのは、軽率であった。

慎重にラッセルしつつ岩壁下部にたどり着く。そこから、登りやすい方へと、左へトラバースを開始する。2m 程進んだところで、トップ宗像の谷側の足下から、7~8センチの厚さで雪面が一気に流れる。5m 程右下を登っていた長岡のすぐ側をかすめ、大樺沢に雪煙があがる。デブリは二股ノ少し上迄達している。長岡は雪崩発生時足元を見ていて、自分のいる雪面が流れているのか、横の雪面が流れているのか判断ができず、一瞬混乱するが急いで岩壁に抱きつく。この時、宗像がやられたと思い、流れていく雪崩を観察するが何も見えず、余計に焦る。しかし、上を見ると宗像が顔をゆがませていて安心する。

それ以上、同じルートを進むのは無謀であるので、傾斜はきついが、右のハイ松帯を登る。壁にあたり、そこから長岡リードでロープを出す。ロープいっぱい 3 級程度の登攀で北岳頂上に立つ。ビバーク地を出発してからすでに 3 時間が経過していた。

これほどの感激を持ってピークに立ったのは長らく無かったことだ。宗像と固い握手を交わし、早々に下降に移る。天気は下り坂だ。

BCに戻り、お茶を飲んで、少し休み下山にかかる。天候は益々悪くなる。

長岡が、林道まで今日中に下る事を主張すると、宗像がごねる。しかし、15 時に小屋に着くと、俄然宗像やる気を出し、日暮れ前に林道着。幕営とする。

12日(土) 晴れ

ゆっくりと来た道をたどる。鷲ノ住山の登り返しは、思ったより楽で時間もかからなかった。鷲ノ住山を越えた林道に出る。日差し明るい、林道を南アルプスノ美しさを噛みしめながらノンビリと歩く。

夜叉神にて、峠から下山してきたご夫婦の車に乗せていただき甲府まで送っていただく。夫婦で百名山踏破を目指しているらしい。そんな結婚生活もわるくないな、と微睡む様な日差しの温もりと、窓の外を流れる景色の中、柄にもなく考えた。

ご夫婦と山の話をしている内に、甲府着。お礼をして別れる。

甲府で、武田信玄と記念撮影したあと、東京および兵庫へと帰っていったとき。

6、反省点

- ① 取り付き点のルートミス。(＆フォール)
- ② 落し物大行進(カメラ、ヘッドラ、ピッケル、ピトン、バイル、宗像)
- ③ 雪崩(アンザイレンの判断)
- ④ 水の管理
- ⑤ cガリー上部での、コミュニケーションの不足。(オレは怖かった)
- ⑥ 燃料もう少しあっても良かったんちゃう?
- ⑦ 銭湯のプレ・スタディー

宗像の自己批判、及び感想

もし、個々のクライミングについて評価が必要なのであれば、このクライミングは失敗であった。卒論でくたくたになっていたから、この計画は長期的な視野の下に立てたものではなかったが、以前から登りたかったルートでもあり、事前の準備においては、綿密な軽量化とトレーニングをはかり、研究もした積もりであった。しかし、既に中央稜の割愛を決めた時点で、僕の中ではすでに消化試合になってしまっていたのであり、それが、自分が引き起こした数々のミスが原因になっているのであるから、何より長岡に対して非常に済まないと思っている。見るからに悪絶な中央稜を夕闇が迫る中見たとき、登れる登れないはとにかく、自分に上る資格はあるのだろうか、と真剣に問い詰めるべきだったのかもしれない。

個々の行動についての分析

- ・取り付きでの間違いは、恐らくピラミッドフェースにとりついたものと考えられる。
- ・フォールについて

何よりルートを間違えたのが最大の原因だが、セットしたフrenズが2つとも抜けたのは、かなりのショックだった。恐らく、雪がつき氷化したところにセットしたため、あっさり抜けたものと思われる。やはりこのような時は面倒がらずに、ピトンを打つべきであったろう。もしくは、最初から、人工頼りに登るべきでもあった。自分が登れるか登れないかを見て判断すべきであり、なれてもないドライトゥーリングに頼っても先を考えずに登るのはやはり軽率だった。

- ・雪崩について

恐らく、あの雪崩に一步でも足をすくわれていたなら、100パーセント死んでいた。バットレスに最近のトレースはまったく見当たらなかったのも、しばらく雪は降っていなかったにしても、城塞上部にはかなりのストレスがたまっており、登る時間に関係なく、何らかのショックが加わればきわめて大規模に雪崩やすい状況にあったのは確かであり、結果的には、明るいうちに通過したのは間違いであったとは思えない。問題はルートの選定であり、恐らく、雪崩発生後とったように、ためらわず直登するのが良かったのかもしれないが、あの時点では、そのような判断が下せなかったのは、経験不足であったのは否めない。

しかし、総じて、今回の登山は自分の中ではいい面悪い面含めて、まったくいい経験をしたと思っている。何より、頂上についたときに、これほど自分の生を実感できた経験は今までなかった。雪崩が起きたとき長岡が「神が見えた」とかいていたが、冗談にしても、山をレジャーのみとして捉えることとは違う種類の経験であり、自分の中には、いつもやりたいとは思わないが、このような経験への憧憬もある。最後に、僕が一橋山岳部の人間として小谷部全助と森川眞三郎そして甘利仁朗を意識していなかったというとうそになる。越えようと思ったのではなく、追体験してみたかった。バットレスは65年前に小谷部がいったように、「厳冬の装いいかめしいこの壁のみは、喧騒の登山界からあたかも取り残されたごとく、太古の静寂の裡に久遠の雪煙をたなびかせ」（「針葉樹」第9号）、その美しい姿を今も僕と長岡に垣間見せてくれた。しかし、テクニクはともかくとして、総合力、とりわけ山を舞台にした想像力について、自分が彼らの足元にも及ばないとははっきりしたように思う。か

とって、今回もこれから先も昔の人と張り合う気はないので、この登山は、僕にとってひとつの経験に過ぎないものとしていずれは印象が薄れていくのだろう。それでいいと思う。最後にいい経験をさせてくれた長岡君。ありがとうございました。

(故人であることから敬称は略させていただきました)

文責：宗像

8. 個人山行<上越国境・平標山～谷川岳>

2月17日

田中の見送りを受け、夕方出発。大宮まですぐに着くだろうと高をくくっていたので、ぐずぐずしていたが、今日中に越後湯沢迄行くために乗らねばならない快速に乗り損ね、高崎から新幹線に乗るハメに。越後湯沢では、雪がじゃんじゃん降りつもり、気分は猛烈に憂鬱だった。

18日(雪)

バス停 6:50—平標登山口 11:30—1600m付近 T S 3:50

6時のバスに乗り、登山口へ。当然雪が降っている。ちょうど除雪をしていたので、途中まで楽に歩けたが、すぐにそれもなくなり、ワカンをつけ、早速ひざ上のラッセル。この後、この状態が延々つづくことになる。いいかげん飽きてきた頃に、やっと登山口に着く。夏なら1時間もかからないだろうに、4時間以上かかった計算になる。その後、尾根に取り付き、また、ひざ上のラッセル。時々、腰くらいになる。2人だからローテーションが早く、その上山田がばててきたので、最後のほうは、一人で黙々とラッセルすることに。山だのテント内での生活は、ほとんど向上していないので。これまでないくらい口やかましく注意した。宗像が筆記用具を忘れ、その上、山田のボールペンはインクが少ししかないので、天気図の記載に多少不安になるが、ボールペンは火であぶると出てくる。

19日(曇りのち晴れ)

6:30 発—平標 10:00—仙の倉 11:00—万太郎山手前避難小屋 T S 3:50

朝からいきなり空身ラッセル。稜線に出てもラッセルだったが、平標手前でクラストしてきたので、アイゼンになる。今日は南岸低気圧の接近により、冬型が崩れ、比較的天気がよくなった。最初の方、休みを取らなかったのが山田がばて気味だが、順調に仙の倉を通過。その後は雪庇を警戒して尾根の左側を通る。稜線上に雪が少ないとはいえ、大分雪庇が発達している。結構、いいペースで予定していた避難小屋までつく。山田が谷側にザックを置いてやすんだので、こっぴどくしかる。この2日間、説教のしまくりだった。まだ、先に進めるがこの先、いいテンバも期待できるかわからないので、少し早いけど、ドアを蹴っ飛ばして中に入り、心地よい就寝。

20日(曇り)

6:15 発—谷川岳肩の小屋 12:30—(頂上往復) 一肩の小屋 T S 1:10

南岸低気圧が関東の南岸を通過するので天気を心配したが、視界が 100m ほどあり、まだ風も穏やかなので、出発。低気圧の影響はここまでは及ばないらしい。雪庇をよけて今度は尾根の右側を進むが、大障子の下りで、尾根を確認するのに手間取った。大体が視界は悪いし、雪庇が右側だったり左側だったり、結構神経を使う上に、時々ラッセルになり、消耗もする。大障子の先の避難小屋の手前で、山田がワカンを着けたまま、滑落し、ひやっとする。オジカ沢の頭あたりまでくると、風も強くなり、視界も 3~50m ほどになってきた。再び冬型が決まってきたのだろう。風強く、稜線も細くなり、いやになってくるが、かまわず前進。特にロープを出すほどのこともなく、肩の小屋に近づくが、肩の小屋の手前では、視界も 30m 以下になり、地形もわかりにくく、小屋見つかるのかなと不安になるが、遠くにぼうっと黒いものが浮かび上がりようやく小屋に着く。時間的にはやいので、このまま下る積もりで、頂上往復する。山田が、一昨日歩いてる途中で折った赤旗の生き残りをさしながら、頂上に向かう。当然何も見えず、直ぐに戻る。この視界では西黒尾根の下り口を見つけるのは無理なので、天神尾根からの下りを予定するが、すでに、小屋に戻るまでにさっきさしたはずの赤旗を見つけるのにも苦勞し、天神尾根に向かうも、猛烈な風で、視界もなく、ツェルトをかぶってしばらく回復を待つが、悪くなるばかりである。ロープを出して下ることも考えたが、呼びもあるし、小屋泊まりもできるので、そのまま肩の小屋で天候回復を待つことにする。

21 日 (吹雪) 停滞

歩ける状態ならロープを出して下ろうと思っていたが、猛烈な吹雪で、とても外には出られない。

22 日 (吹雪) 停滞

昨日同様、猛烈な吹雪、ラジオから群馬県北部の大雪を伝えてくるが、ここは風強く、実感がわからない。NHK の連ドラを 2 回もラジオで聞いて、暇を持て余す。明日の回復の後は再び冬型に戻るようなので、明日にかける。山田はまったく大丈夫な素振りを見せるが、パートナーが山田だけに、内心かなり不安。

23 日 (曇りのち晴れ)

9:30 発—4:00 天神平

朝、徐々に風が収まってきて、歩ける状態になってきたので、視界は 30m ほどだが、今日を逃すとまた冬型になるので、ロープを出して天神尾根を下ることにする。東にトラバースした後、ロープを出して下り始める。多少東よりに下れば、尾根ノヘリに当たるはずだと思い、ロープを伸ばす。小屋では実感がなかったが、猛烈なラッセル。腰以上の深さがある。恐らく、2m 以上降り積もったのではないだろうか。7 ピッチほど出してようやくヘリらしいものに当たる。それにそって下っていると視界が回復してきて、何故か右側に、尾根らし

きものが見える。その尾根目指してトラバースし、尾根上に出て、少し下ると、赤旗があった。それにしても、すごいラッセルである。下りでワカンを着けているにも関わらず、深いところは腰以上あった。その後もラッセルを繰り返す、ようやくスキー場の上に着いた。2時間ぐらいでつくと思っていたが、何と5時間以上かかっていた。振り返ってめがねをかけて晴れた谷川を見る、自分たちのつけたトレースがはっきり見える。やっぱりロープを出して下ったところは大きく尾根をそれていて、大分西黒尾根の方によっていて、嫌な気分だった。視界が悪い時の下りがいかに難しいか、再認識させられた。後はスキー場を下るだけと思っていたが、スキー場の中もラッセルで、へろへろになって、やっとテレキャビンの乗り場に着いた。1週間ぶりに山田以外の人間にあい、なんとなくほっとする。井上さん、それに関学の長岡に電話をしたが、かなり心配されていたようで、ご迷惑をおかけしました。自身としても、この一日を逃すと恐らく下山はおぼつかなかったと思う。それにしても、なかなか充実した越後の山旅であった。山田も、最後のほうはしっかりラッセルもしてくれて、数日間で大分向上が見られたと思う。今回の山行で3kgやせてしまった。

9. 個人山行<西伊豆波勝崎海金剛>

参加メンバー:宗像/大田(上智大学山岳部OB)・芥川(関西学院大学WV部OB)

2/25(曇り)

早朝に新三郷を出発し伊豆まで、アプローチのトラバース道はテープなどがあって迷うこともないが、所々崩れ落ちているところがあり、緊張する。最後、フィックスをこぼすので下り海岸へ。いつもの通り計画性なく、フィックスするのも面倒だから、波打ち際のフリールートを決つきのぼることにする。すぐに時間が来たが、有持真人氏のグレーディングは少し甘い気がする。若い男女のパーティーがいて、明日、スーパーハルナを登るらしい。車道まで引き返し、キャンプ場を物色するが、山じゃないだけに、ばらばらに高い。しやあないから、休憩場の中に強引にテントを張って泊まる。

2/26(晴れ) 開始7:00—終了5:00頃

下部“SURF&SNOW”上部ルート開拓?「積み木くずし」

伊豆といえどもこの時期は未だ寒く、ヤッケをきて登ることにする。海岸からがれがれのところを詰めて、灌木でビレイする。今回は下部をすべて大田の担当、上部を宗像の担当とし、クリーニングはその逆で、ユマーリングと荷揚げを芥川に担当してもらうことにした。

1P はっきりいってリードしないとこのシステムはほとんど覚えていない。手袋落とすものあり。

2P 有持氏の解説通り、右の方からクラックを目指してフェースを詰めるが、大田の打ったロストアローが抜けて、3mほど落ちる。何も前触れ無しで、少し驚く。このピッチは最

初から左の立木を使えば、さっさと行ける。クリーニングには少し苦勞した。上部のフリーの部分は草付きでいやな感じ。

3p 緩傾斜帯はそのまま真っすぐ登ったが、これが失敗のもとだった。中央のバンドから上、資料では左側壁にルートが取られているが、見たところそれらしきクラックも近くには見当たらず、あるとしてもずっと左の離れたところにあるので、正面のもろそうな積み木が積み重なっているような凹角にルートを取ることにする。ルート図はパソコンからダウンロードできなくて、持ってなかった。

4p A1、5・8? 30m

早速、不快な草つき凹角を詰めるが、何故か潮風でぼろぼろになったフレンズを発見。その後、自分の目の前には非常にもろそうな岩が積み重なっている。左にフレンズのかげかえでトラバースすることも可能だったが、なんとなく気が進まず、そのまま前進。頭上に伸びるクラック、または右手の岩が積み重なった凹角のどちらかをルートにすることにする。10mほど登ってネイリングがはじまるが、のっけからクラックが切れ切れで、しかも目の前の岩が畳状にはがれてきそうで、その脇のクラックにハーケンを打つのが怖い。それでもその近くにスカイフックをかけようとしたら、かけた岩ごとぼこっと崩れ落ち辞書くらいの岩がいくつも落ちてきて、頭に当たる。もちろんヘルメットをしていたが、右耳からかなり出欠。何故か敗退する気にもならなかったし、大勢に影響もないので、耳につばつけて、今度は微妙なフリーでバランスを取りつつ、何とか左上のリスにナイフブレードを打ちこむ。今度は効いた。その後は微妙なフリーで右上し、岩が積み重なった凹角を医師を落とさないように気を付けながら登りきると、ななめったテラスの奥にきれいなクラックの走ったジェードルがあり、そこにペツルが2本打ってあるので、そこでピッチを切った。このピッチ、すべての岩が信用できない。ずっと左下のほうにペツルが整備されている。どうやら、正規のルートはやっぱりずっと左から取りつくらしい。

使用ギア：ナイフブレード、フレンズ、キャメロット

5p A1、5・8、30m

はっきりいって、先がわからない中ロープを伸ばすのは初めての経験なので、非常に精神的につらくて太田に代わって欲しかったが、太田は自分の担当が終わったからすでに気楽モードで、さらさらその気はない。しょうがないからフレンズのかげかえで登り始める。すでに麻痺してきたので、バウンズテストもやらなくなってきた。7~8mほどクラックを詰めると、フェース状になり、クラックも走っているが、上のほうのおっきなクラックまで、フリーでがんばってみる。結構微妙。そのクラックをフレンズのかげかえで詰め、大きな木でビレー。ユマーリングしてきた二人に、僕がフリーでがんばったことなんか、これぼっちもわかってなかった。個々のテラスは広いので一息つく。

使用ギア：フレンズ、キャメロット、(大きめのもの)

6p A1、5・7、40m

この上を直線的に詰めると、ライン的には非常に美しくなると思うが、もとより開拓に来たのでもなく、時間も押していたので、多少草つきで汚いが、やさしそうな左のほうを登る。所々ある立った部分をネイリングしつつ、主にフリー主体で立木まで。この後はつたの張った岩がブッシュ交じりで続いているだけなので、ここで終了とした。天気はいいが風があるので、伊豆といえどもまだまだ寒くて、さっさと下降に移った。同ルート懸垂で、海岸に戻る。途中、岩角でロープが痛み、ブータンで散々紫外線を浴びた黒ロープはついにお釈迦になった。

使用ギア:ロストアロー、キャメロット

九州での開拓の練習のつもりが、開拓になってしまった。

ペツルも打ってあって最後の 2p は登られていないかどうか良くわからないが、岩が積み重なったところを登ったばかりは僕がはじめてかもしれないので、仮にルート名を「積み木くずし」とした。はっきりいって、間違えて取りついたので、記録の発表など恥ずかしい。が、下からもう一度見上げると、直線的なラインで良くできたと思う。もろい岩を叩き落とし、その上のクラックをネイリングすれば、それなりに登られるようにはなるかもしれない。少なくともとても一本のラインとは思えない“SURF&SNOW”よりましな気がする。負け惜しみ？上部はともかく、下部はブッシュがうるさくて、あくまでも練習の岩場という感じで、この岩場の評価はいまいち。フォールしても平気な顔で登る太田と、落石をくらって登りつづける僕に対する芥川の感想。「おまえら終わってる・・・」

以下、学生登山者メーリングリストでの有持真人氏の解説

SURF&SNOW の話がでてきましたのでフォローさせていただきます。

積み木くずしのトポを見たわけではないので、メールの内容から判断させていただきます。

上部岩壁ですが、4p 目は「TORITON」の 8p 目のすぐ右側を登ったのだと思います。

4p 目の終了点にあったペツルハンガーは「TORITON」の 8p 目の終了点になります。

5p 目のクラックは「TORITON」の 9p 目になります。

6p 目ははっきり覚えていませんが、静岡山岳会の鴨下さんが作った「はるなライン」に使われていたような気がします。2年ぐらい前の山溪に記録が出ていましたので、確認してみてください。

6p 目が鴨下さんのラインなら、積み木くずしのオリジナルラインは 4p 目だけと言うことになります。

>れるようになるかもしれない。少なくともとても一本のラインとは思えない“SURF&SNOW”よりはましな気がする。負け惜しみ？上部はともかく、下部はブッシュがうるさくて、あくまでも練習の岩場という感じで、この岩場の評価はいまいち。

SURF&SNOW はともとても一本のラインとは思えないというご意見は、ルートが直線的ではないと言うことでしょうか?? 上部岩壁で目立つクラックをつなげたのが、SURF&SNOW です。クラックの出だしが岩壁の左側にあったので、ルートが直線的ではないのはしかたがありません。

とにかく、海金剛はブッシュも多いし、壁の途中で何カ所も傾斜が落ちるので、本格的なネイリングルートと言うよりはゲレンデと言う方がと私も思います。

ワンポイント情報

多摩中央警察署の玄関には警察のマスコット「ピーポー君」ではなく、佐藤製菓のマスコット「サトちゃん」がおかれている。

10. 個人山行 <九州クライミングツアーと帰省>

参加メンバー (きりぎりす同人、チームぎりぎりっす)

宗像/相原 (法政大学山岳部 5年)・太田 (上智大学山岳部 OB)

今回のクライミングについて

大分県宮崎県の県境にある傾山二つ坊主の岩場は、古い「日本の岩場」に 1 ページだけ収録されている。現在この岩場に取りつく人間は皆無と言っていいにもかかわらず、その内容はいくつものハングが連続し、また、ルート数も少ないことから、充実し、かつ、開拓の余地があるものと予想した。今回、太田の有給休暇に合わせ、僕の帰省もかねて、この岩場を開拓し、さらに、宮崎まで足を伸ばし、クライミングツアーを組むことにした。

結果は 3p 敗退ということになり、不満足な結果となったが、完成すればエイド技術を駆使した良いルートになることと思う。九州まで足を伸ばす機会はあまりないでしょうが、我々以外の人に完成してもらってもかまわないのでプロジェクトとした。ルート名は仮に「ヘボのレクレーション未満」としておきます。(「ランナウト」参照) 完成させた人が、正式な名前をつけてください。

Part 1

3月4日

一昼夜高速を太田号をぶっ飛ばして、夜 7 時過ぎに、大分県犬飼町の宗像の実家に到着。ついたとたんに母親との会話がなまる宗像に、相原がひいていた。早速呑む。ギアを整理して就寝。

5日(曇り) 1:30 山手本谷入溪—3:30 二つ坊主沢、南坊主沢二股 B C 3:40—4:00 二つ坊主偵察 4:30—4:50 B C

うぐいすの声で目を覚ます。

なぜか家にあったイエロサブマリン音頭のカセットを聞きながら傾きに向かう。傾への路は、上京する前は良く通ったところなので、勝手もわかっていたが、今回、登山口のある上畑の最後の店によってみた。このあたりの風景は、谷間のこんなところに? というようなところ

に家や田んぼが間欠的に出現し、ブータンと共通するところがあったが、むしろ、ブータンがこの風景に似てたんだろう。「広葉樹林文化だ」とか意味もわかってないせに感動する。店には焼酎だけはやたら充実している。なだいなだが言ってるように近代化と酒はやはり密接な関係があると思う。店にはだれもいないが、隣で植木のせんていをしていた無愛想な親父が主人だった。ビールを買い足し、店の前にガソリンスタンドらしきものがあるので聞いてみると、入れてくれると言う。はんでんを着た親父が山々に囲まれてガソリンを入れる姿はなかなかおつだった。リッター109円。

傾山の正式な登山道には向かわずに、途中から林道に入る。僕の記憶では、ゲートがあっても常に開いているはずだったが、案の定開いていた。途中、シカ、ヤマドリが車の前を横切る。時々林道上に落ちている石を車から降りてどけながら山手本谷の入渓点である橋につく。天気が良ければつづら越から岩場を眺めてみる予定だったが、ガスが出ているのでそのまま岩場に向かう。この風景は山水画のように趣がある。前日雨が降ったので石が濡れていてトレッキングシューズではすべる。所々水線通しに行かねばならず、おっきな岩がごろごろして、30キロ程度を背負っての沢登りはかなりつらい。岩場は見えないので二つ坊主沢の分岐点がわからない。しばらく行って、ガスが晴れたところで、二つ坊主の岩場の上部と、喜作坊主の岩場が現れた。火立つ坊主はやはりハングが連続していて、どうしてもクラックの走っている喜作坊主に眼が行ってしまう3人であった。ここまできたんだからと、行きすぎた路を引き返し、南坊主沢に入る。この沢は水が涸れていて歩きにくい。二つ坊主沢との二股に荷物を置き、太田、宗像で偵察、相原が水汲みに引き返す事にする。ここから先の沢登りも結構いやで、重荷では歩きたくなかった。途中、氷が張っているところがあり、びっくりする。沢を詰めると広がって、岩場につく。二つ坊主は結構な岩壁で、やはり下部のハングはこれまで見たこともないくらい圧倒的だった。右手の岩場の対岸から眺めてみるが、とにかくでかい、かつかぶっている。またブッシュもほとんどなくすっきりしていて、岩も堅そうだった。岩質は良く分からなかった、凝灰岩かも知れない。クラックはすっと走っているという感じではなく、切れ切れのクラックが全体的に立体的なフェース、ハングに走っているという感じだった。中間にもみじバンドというバンドが走っていて、それで上下に分けられるが、上下ともに4pくらいで、平均斜度90度といったところだろう。はっきりいって、おしっこちびりそうなくらいびびってしまい、「おおー」とか「すげー」とか言うばかりで、双眼鏡で見ても、明確なラインは決めかねた。ここ何年も人が入っていないようで、残置のピトン等は見当たらなかったが、九州だけあって、酒瓶だけはやたら転がっていた。シカのふんがやたらある。岩場の基部にテントを張れそうで、二つ坊主沢にも水の染みだしがあったが、岩の下は精神衛生上良くないということで、さっきの二股をBCとする。河原を整地して何とかテントを張り、焚き火をして、家から持ってきた泡盛を飲む。林道からわずか数時間歩いただけだが、非常に山深い。ここいらはコメツガの原生林が有名なところだが、九州では絶滅したと言われる熊が、時折この山域で目撃されるのがわかる気がする。奥多摩や奥秩父なら、いくら山奥に入っても、ちょっとこういった深さは感じられない。焚

き火を囲みながら、太田と相原に喜作落としの哀しい昔話を聞かせて眠りにつく。オリオン座が良く見えた。

6 日 (曇りのち晴れ)

6:40BC 発—10:55 取りつき—14:00 トップ交代—15:401p 目終了点—18:00BC

夜、一晩中シカの声がする。大分は東京より 2~30 分ほど夜明けが遅い。朝食を取ってもまだ暗いのもう一回寝るが、キツツキのコンコンコンという音で、起こされる。結構寒い。基部についた後、どのラインがいいか、右から左に偵察する。13m の張り出しの大ハンダに、昨日は見えなかったスリングを発見。他にも、残置ピトンやらを発見し、大体、大系に載っているルートは確認できたが、いうまでもなく、残置物は信頼できず、無視してもいいだろう。中央カンテから左は圧倒的な迫力でせせり立つ。まず、苦しいだろうと言うことで、中央カンテから右のほうへと、目を向ける。中央カンテから、右端の大分登高会までの間は、すべて下部がかぶっており、かつ広いにもかかわらず 2 登されていない広島山の会ルートがあるだけのはずで、この範囲にねらいをつける。昨日の展望台から観察すると、下部ハンダ帯のほぼ正面に三日月状の顕著なクラックがある。そこから上も右上気味にクラックが走っている。さらにその上にはホームベース状のフェースがあり、どくろフェースと名づける。ルートはこのフェースの左のジェードル状のところを詰めて、もみじバンドにでられそう。もみじバンドから上は、もみじバンドについてから考えることにする。

1p 目 5・7、A2、30m

三日月クラックに入り込む為にはいくつかラインが考えられたが、おそらく、広島山の会ルートであろうボルトラダーの右のピナクル上のつたが這っている泥だらけのクラックから太田リードで取りつくことにする。ピナクルにからんでアングル、キャメロットでずり上がる。細いブッシュにタイオフし、次のリスを探っていると、ブッシュが折れ、本日 1 回目のフォール。ピナクルに足をぶつけていたが怪我はなかったようだ。別のルートを探ることにし、5m 右手のフェースをフリーで登り、切れ切れのリスを拾い、ツタが絡んでいる右上気味のクラックをめざすことにする。ナイフブレードのタイオフ、ロストアローのネイリング主体で、前進。かなり時間もかかりなかなか進まない。フォール、またフォール三たびフォール。フリー並みに良く落ちる太田を、下でラジオを聞きながらボーっと見る。ラジオでこれだけはやめて欲しいというテーマで DJ がしゃべってたが、目でこっちに訴えかけるのだけは、太田にやめて欲しい。が、15m くらいすすんだ 3 回目のフォールでついに「代わってくれ」と言ってきたので、ローダウンで太田を下ろす。相原選手に交代。三日月クラックまで直上する。フリーでワイドクラックをたどり、最後はエイドで松の木の生えたレッジへ。リングボルトを 1 本打ち、木とともにアンカーとする。クリーニングをしてフィックス。後で見たが、ボルトははかなり浅打ちだった。時間も遅いので、ギアをデポして、空中懸垂で下りる。3 月の九州は日が出るとあったかいが、風は冷たかった。3 人とも、1 日で 1p しか進まなかったことにかなりショック。慣れてないので仕方ないとも思うが、それに

しても。

今日もオリオン座が良く見える。焚き火をして家から持ってきたサツマイモを焼き芋にする。水は沢を 10 分ほど下ったところにある。ビールはすでになく、泡盛もなくなった。今日の調子では、時間がかかるだろうから、一番上迄行くのはあきらめて、もみじバンドまでのルートにすることに話が落ち着きそうになる。とりあえず、明日、足りない分の食糧と酒を車まで誰かが戻って取ってくることにする。

使用ギア：ナイフブレード多数、ロストアロー、バカブー (2)、フレンズ多数、キャメロット。スライダー、ナッツ、終了点にリングボルト (1)

7 日 (晴れ)

8:402p 目取りつきー10:002p 目終了点ー11:30 3 p 目開始ー2:00 交代ー3:40 敗退ー4:30 取りつきー5:20 B C

2 p 目 5・9、A2、15m

相原が車まであるだけの食糧を取りに行き、太田、宗像でルートを伸ばすことにする。昨日のフィックスをユマールするが、いきなりの空中ユマールはかなりつらい。ビレー点の木を左側からのっこし、右上気味にⅢ級くらいのトラバース。さらに右上気味にエイド。1 ポイントスカイフックと、岩角にスリングをかけて前進手段とした。このあたり下がらないので、かなり高度感がある。そこから、上の松の木を目指して、再び立体的なフェースをピトンを打ちながらのフリーでの直上になるが、体感グレードは 5・10b くらいあったような気がしたが、冷静に考えて、グレードを下げる。また、リスも少なく、ランナウトする。松ノ木のテラスは、結構広く、草つきなので快適。松ノ木とブッシュでアンカーとし、ピトンを打ってバックアップとした。すでに相原は、荷物を取って帰ってきていたので、クリーニング、ユマーリングをして、3 人ともテラスに集合。このピッチはラインも明確で、下手な僕でも比較的早かった。

使用ギア：フレンズ、ロストアロー、ナイフブレード、スカイフック、バカブー

3 p 目 5・10ア、A3、敗退ポイントまで 30m

時折、上のほうから落氷がある。ようやく日が当たってきた。

太田の順番。立体的なフェースをエイドで直上し、カンテをフリーで右に回りこみ、さらに微妙なフェースをフリーで直上。下から見えたどくろフェース下の 2 本のクラックの右のほうを目指す。ここから太田は見えなくなるが、動かなくなり、しばらくしてロープが伸びる。相原が右のほうに太田を発見。トラバースしてみたり、懸垂してみたり、目で訴えてみたり、ロープダウンしてみたり。結局交代で、宗像に代わることに。カム類だけ持って、5・10b くらいのクラックをフリーで登れると思ったが、つかれたから、大分登高会の方から下りてきたとおっしゃる。

太田のいった通り、フレンズ類だけ持って、太田に吊上げてもらい、最後のピンのところまで来たが、たしかにネイリングではクラックは切れ切れで、かといって、太田の言うように

フレンズのかませられそうなところもない。フリーでは 5・11 くらいに見える。どうやら、スカイフックのかけかえで前進できそうなので、度胸を決め、下の連中の残りのギアを上げてもらおう。当然、信頼できるピンが得られなければ、敗退もままならないことになるが、一応、泥の詰まったクラックは伸びているので希望をつなぐ。はっきりいって、この後の 10m ほどはむちゃくちゃ怖かった。こんな連続するフッキングはやったことないし、プロテクションで信頼できそうなのは、ナイフブレード 1 本と岩角にかけたスリングだけだった。他のピトンの類は、すべタイオフ。その上、ハンマーを打つときすりむいて、手が血だらけになる。7~8m 程前進したところで、クラックは未だ続いているが、左のほうにきれいな縦クラックの走った岩が見えるので、そこまでフッキングでトラバースする。終了点は 5m ほど左上に期待できそう。ナイフブレードの 1 番は完売だったので、2 番にタイオフして立ち込み、そのクラックに長めのバカブーを打ち込むが、何故かどんどん入って行って、手応えのないままあごがついた。まあ、あごが利いているはずだから大丈夫だろうと、と思って立ちこんだ瞬間ダイブ。当然下のナイフブレードは飛び、その下のアングルのタイオフも飛び、ナッツが半分ほど取れかかって、それで止まった。5m ほどフォール。ロストアローを打ち込めばよかったと思なおし、再びさっきのところまで、ピンを取りなおしながら登り返すが、落ちれば飛ぶとわかっているピンを打ち直すのはかなりむなしい。さっきのところまで戻り、またもいやなナイフブレードのタイオフに立ち込み、さっきのクラックに長めのロストアローを打ち込むが、またもやどんどん入っていく。どうしてだろ、もしかして、と思ったときにはすでに遅く、クラックの上のザックくらいの岩がそのままスライドして、じぶんめがけて落ちてくる。たまらず、手でかわそうとするが、岩が大きすぎてもちろん当たった。ナイフブレードがかろうじて抜けず、

フォールはまぬかれた。下のほうで岩が砕け散る乾いた音がする。下の二人は、昼寝をしていた相原を含めて無事だったようだが、こっちは、両手にかなりのダメージを受けた。それでも、落ちた岩の跡にクラックを探したが、左手の小指のつけねがはれていてかなり痛く、右手も突き指したようで冷静に考えるとハンマーもふれないうち、骨が折れてるってこともありうると思ひ、敗退を決定。終了点がまじかなだけにむちゃくちゃ悔しい。寒いのとダメージで指がつってるにも関わらず、さっきのナッツのところまでフッキングで下り、半分抜けかけのナッツに体重をかけてローダウン。ダメージがでかいので、フレンズ以外のピンは不本意だがすべて残置した。敗因は、クラックの上の岩が浮いていると読めなかった自分の未熟さだろうが、もし、もう一回つめるなら、左にトラバースせずにクラックをそのまま詰めるか、落ちた岩のところのマニアックなネイリングになるだろう。最後に壁を眺め、失意のまま BC に戻り。時間も遅いし、僕の指の痛みも引いて来てるようなので、病院に行くのはあす以降とし、再び焚き火をして、最後のここでの夜を過ごす。今日もオリオン座がきれいだが、敗退した後はいつそうきれいに見える。しかし、きょう相原が荷揚げしてくれたおかげで、再びうまい酒にありつけた。

使用ギア：ナイフブレード多数、バカブー、ロストアロー、フレンズ、スカイフック、ナツ

ツ、大き目のアングル (全体的に殆ど浅打ち)

Part2

8日 (晴れ)

移動日。さっさと沢を下って、車に乗って後半戦の宮崎方面へと向かう。途中、うちの親父が若い頃教えて、今は廃校、林間学校になっている上畑小学校に寄ってみる。インターホンがついて、シャワーもあるようなので、入る気もないくせに押してみる。驚いたことに、おばちゃんの返事がある。太田が「聞いてみただけです」とか、小学生みたいな返答をしていた。それにしても、このインターホンはどこにつながってるんだろう。さらに奥の尾平で昔小学校で、今はその建物を利用しての宿泊施設になっているところで、またもや無愛想な親父に聞いてみると、風呂が使えるようなので、使わせてもらおう。一人 315 円。昔、廃校の校舎そのままだったとき、勝手に入って教室に泊まらせてもらってたが、いま、その面影は、10m ほどのオタマジャクシを養殖しているとしか思えない汚いプールだけだった。ここは、九州で唯一のアルペ的な風景が見られるところで、祖母の山々が非常に美しく、川もきれいに見えるが、昔、鉾山だったため、今も人が駐在して鉾毒を中和していて、ここの川の水は飲めない。尾平越のトンネルを越えると宮崎県に入る。高千穂の棚田は非常に美しく、関東ではこういう風景はちょっと見られない。天の岩戸神話によってみるか、と提案するが、太田と相原は岩戸神話をまったく知らず、かなり驚いた。小さい頃から岩戸神楽を見て育った僕は常識だと思っていたので、「非国民」とか、まったく通用しない避難を浴びせ、観光に連れ出す。岩戸神社にあった岩戸を開いたアマノタジカラオの像を、「岩を受けた宗像だ」とか言って、相原が写真を撮っていた。高千穂町立病院でレントゲンを撮ってもらったが、異常なく、ツアー続行。途中から、細い道に入り、右手に比叡、左手に矢筈岳のすばらしいロケーションを素通りして上鹿川へ。鉾岳の見えるキャンプ場に泊まれることが判明。囲炉裏から風呂までついていて、酒は飲み放題、一泊 800 円は惜しくない。誰もいないがありがたく使わせてもらった。ちなみに、今年、ミレニアム料金改定らしく、600 円から 200 円値上げしていたが、次の料金改定は西暦 3000 年らしい。奈須商店で一番安い肉はビーフジャーキーの味がした。

9日 (晴れ)

7:00 発—8:50 取り付き—1:00 終了点—(比叡に移動)—3:45 左岩稜取り付き—5:30 ニードルの頭—6:10 発 (延岡経由で大崩山登山口に移動)

掃除をして庵をあとにする。キャンプ場からのアプローチで『日本の岩場』の通りに進むが少し迷う。林道を道なりに行けば標識が出ている。雌鉾の大スラブは圧倒的。「四月の風ルート」も見に行くが、難しそうなので、「美しいトラバースルート」へ。最初の 3p は相原。ボルトがなくかなり怖そうで、自分の担当でなくてほんと良かった。平均して 1p に 2 本あるかないかくらい。フレンズを持ってきていれば使えた。トラバースの 3p は宗像。ルートとビレイ点がわかりずらく苦勞する。大体が、資料コピーするのを忘れてて、『日本の岩場』

をそのままもってきて、「こっから先は？」とか聞いてみたり、ページをめくってうしろからも「もっと右じゃない」とか指示してみたり、概念がまったく頭に入っていないくせに、かなりいいかげん。にもかかわらず、このトラバースはむちゃくちゃ怖い。ラストの2pのエイド込みルートは、渋目のクライミングに定評のある太田投入。ボルトの間隔の遠さは訳がわからん。「庵の連中はみんな巨人だろ」とか、かつてなことをいいながら登るが、途中、フリーも入り、結構シビア。最後のピッチはA01箇所のフリー。終了点から3の坊主に上がり、懸垂の後、踏み跡をたどる。このルートの評価は「狂ってる」から、相原いわく「快適で楽しい」になっていた。☆☆☆。日が当たって、右の大滝の氷が何度も崩壊していた。奈須商店に挨拶して、比叡に移動。何故か奈須商店には天保年間の焼酎と、ビールサーバーが置いてある。日数に制限があるので、急いでニードル左岩稜に取りつく。ここの岩場は車道からすぐのところからロングルートに取り付け、超お手軽。相原リードで開始。1p目、左のIV級から取りついてしまい、フリーでがんばってみるが、ザックをしょってるとかなりつらい。2p目、フレイクからクラック、最高に快適。3p目、相原は、V級のクラックをハンドジャムでぐいぐい登るが、一昨日のダメージで、ジャムなんてとてもできない自分は、バランスを要求され、なかなか苦労する。ニードルの頂上についたところで時間切れ。しかし、このルートは質の高いフリーが凝縮されていて、同じく☆☆☆。眺めも最高。1峰とのコルの間を懸垂で下り、急な踏み跡をたどって、まだ明るいうちに取り付きにもどる。延岡で、買い出しをして、上祝子に向かうが、延岡の土地の使い方は、爽快なくらい贅沢だ。登山口の近くの林道に、テントを張る。

12日（晴れ）

7:55 発—10:00 登攀開始—1:00 中央ベランダー—4:30 終了点—6:15 登山口

本日、1本のみなので、長いルートであるにも関わらず、合議の下遅く起きる。大崩ダキが良く見える。河原に下りると左手に小積ダキが現れる。見たこともないくせに、「日本のインスボンだ」とか、いいかげんなことをいってみる。登山道の途中から、小積沢を詰めると、目の前にどーんと現れるが、取り付きは左のほうで、基部をぐるっとまわって、谷底のボルトトラダーを見つけ出す。雪もある。逆算して、1p25分、はまり禁止というできるわけもない制限をつける。最初の3pはようまあこれだけ打った、と思うくらいのボルトトラダー。当然、太田の担当。所々ペツルに打ちかえてるが、このまま放っておいたら、隣のクラックを使った。AAのルートになるんじゃないかと考えてしまう。なにげに間隔も遠い。はっきりいって、他人の打ったボルトトラダーなんか信用できなくてあんまり好きじゃない。3p目のV級のところは、難しくてA0に入った。ベランダーで休憩してまわりを見まわすと、この辺りは、まだまだ、クラックのルートがたくさん開けそうな気はする。藪を縫って、チムニー取り付きへ。ここで挟まれ系に強い相原先生を投入。下のスクイズチムニーは難しくはないが、文字通りはまる。そこでピッチを切る。その上のアフウィズスを相原が半身をいれてずりずり這い上がる。「こんなところにボルト打っちゃいけないよ」とか相原は言っているが、それを使ってA0で登っているのだからえらそうなことという理由もない。相原が登っている間は、

かっこわるさにワッハッハ、と笑ってたが、自分の番になるとこんな種類のクライミングはしたことないので、にっちもさっちも行かなくなる。自分もイモムシだ。とか訳のわからん暗示をかけて、へろへろになりながら、ようやく相原のところにたどり着く。ここをリードした相原を尊敬。次のピッチはほんとにトンネルを潜り抜けるのが登攀というより歩き。ここで、ようやく宗像に交代。次のIV級のピッチは結構渋く、ここのグレーディングは関東より半グレードも渋めという気がした。ペツルを打ってあるがフレンズが有効。さっきの相原の言葉、わからんでもない。上部難しくA0入った。すでに下のほうでA0入っているのに、フリーにこだわる理由もない。次のピッチは3pほどペツルの人工が入り、その後も渋いIV級。少しもろい。ペツルの終了点でハンギングビレー。最終ピッチ、右にトラバースした後、頭上のクラックに入るがとてもIV級とは思えず、A0入りまくりで、右に縦横にクラックの入ったフェースを右上に抜けて、テラス下で終了とした。今回もコピーし忘れたので、疑心暗鬼の中の登攀となった。時間も遅いので、頂上はあきらめて、そのまま坊主尾根を下る。相原と、「変化のあるいいルートだけど、下の3pはいらんあー」とか話していたら、太田がいやな顔をした。まだ、山開き前なので、所々はしごが壊れ、この尾根は危険。この辺りの溪谷美は開放的で、非常に美しく、今回が2回目だが、もう一回来たいところだ。車に荷物を放り込み、宗像の実家へ。途中、トトロのバス停によって帰った。

11日（雨）

本日、本匠にフリーに行く予定だったが、とてもそんな空模様ではなく、信じられないことに雪まで降ってきた。家にいると、大分の言葉とうさんくさい標準語の使い分けがむちゃくちゃ面倒くさい。犬飼にある、忘れられたフリーエリアを見に行こうとしたが、太田の車のそこをぶつける。犬飼の岩場はペツルもうってあって湯河原の正面壁くらいあるので、九州の人、思い出して登ってやってください。GSのおっさんは早口の大分弁だから相原、太田は当然聞き取れないが、自分も聞き取りにくく、自分は流暢な大分弁を話せる稀有な若者だ、と自負してきただけに、かなりショック。さっさと東京に戻る（上京する？）ことにする。途中、去年も寄った、大分大学山岳部の部室に用もないのによってみた。去年以上の汚さぶりに唾然。ノートに書き込みをして帰ってきた。雪の中、再び高速をぶっ飛ばして東京に戻る。

傾山の岩場について

今回、結局ルートを開くことはできなかったが、完成していれば、自分で言うのもなんだがかなりいいルートになっていたことであろうと思う。二つ坊主の岩場は、アプローチも徒歩1時間ちょっとで、スケールは今の基準では大きいとはいえないにしても、既存ルートは無視していいと思うので、開拓の余地が十二分にある。何ととっても、あのよう傾斜の強い壁はそうないし、連続するハング帯にルートを開くのであれば、他のエリアではちょっと味わえないクライミングができると思った。僕らの開こうとしたルートの左側など、玄人好み

のエイドルートが何本も引けそうだった。ちなみに「ヘボのレクレーション未満」を完成するには、下部は残置がまったくないので 2p 目の終了点まで、再びネイリングで登り返すか、大分登高会ルートに登って、左にトラバースすれば、2p 目の終了点に合流できそうだった。ただし、大分登高会ルートのボルトラダーはさびているのでまったく信用できないと思う。また、このあたりには、スケールは二つ坊主に劣るものの、本傾や喜作坊主にもまだほとんど手を触れられていない岩場がある。喜作坊主など、ブッシュはうるさそうだが、きれいなクラックが走っていて、まだ、既存ルートがほとんどないのが不思議だった。3 人の印象では、もっと注目されてもいいんじゃないか、と言うことで一致したが、本州から遠いのは事実である。

宮崎の岩場について

今回、3つのエリアを登ってみたが、どのエリアも☆☆☆だった。大体がアプローチが近いので、アルプスなんかで、何時間も歩いて、もろくてせこくてうんちくばっかりたれるクライマーのうじゃうじゃいる岩場に取り付くのがばかばかしくなってくる。その意味で、九州は非常に恵まれているクライミングのエリアであると思う。山登りにはそれぞれの地域にあった登り方があると思うが、九州のクライマーがアルプスに毎回合宿なんかで出てくるのは金もかかるし、それよりは、クラック、フェース、スラブ、エイド、それに開拓もできる地元で腕を磨いて、年に一回くらい、金をためてヨセミテやトランゴに行った方がリーズナブルな気がしないでもない。関東の人間と同じことをやっても近いところにいる人間のほうが有利に決まっているのだから、山登りは競争ではないと思うので、そういう登り方であってもいいのではないだろうか。(文責：宗像充)

「じゃあけん？じゃあけん、どしたあん」

生意気な小学生はこう言って相手の怒りを倍増させる。

こうやって大人に嫌われていた宗像充 7 才

すもつくれん

Give me a break!

誰も酢なんか作ったりやせんのに、価値観がわからないだけでクダランと思われ、酢も作れんと言われることほど、ムカつくことはない。

あたしゃ酢はつくれんが みりんなら作れるで

吉村ウメ 89 歳の主張

1.1. 春合宿の記録

抜戸岳南尾根—笠ヶ岳—広サコ尾根東北支稜 (とおぼしきもの)

参加万バー(関西学院、一橋大混成)

CL 宗像（一橋 5）、SL 長岡（関西学院 5）、山田（一橋 1）

笠ヶ岳について

笠ヶ岳は飛騨の目立たない山であるが、形のきれいないい山であると思う。この山に積雪期登るため、宗像、長岡とも 3 年前からいくつも計画をたて、かつ、実行してみたが、何回も失敗した。困難性というより、それ以外の理由が多いのだが、言いかげん学生の内にやっつけておきたいという 2 人の強い意向で、合同での合宿を組んだが、直前に関学森が不参加になり、5 年、5 年、1 年という変則的なパーティー編成となった。

3 月 17 日（雪）

14:00 宗像・山田、新穂高着、16:30 長岡新穂高着

本日、新穂高集合後、取りつきまで行く予定だったが、飛騨高山で今日の晩飯の買い出しをしている長岡がバスに乗り遅れたため、結局、新穂高のトイレで寝ることとなる。外はじゃんじゃん雪が降っているので、食堂のおばちゃんと若乃花の引退記者会見を 3 回ぐらい見ていると、ようやくバスがやってきた。ついこの間まで、大分の実家でうぐいすの声を聞いていたのに、突然雪の中で、その上、中途半端にあったかいトイレに寝たため、風邪をひいた。

18 日（晴れ）

4:30 起床～6:05 新穂高温泉～7:25 クサコバ取付～11:55 主稜線から 13:00P4～15:50 穴毛槍手前 TS

連休のためか、新穂高には結構登山者がいた。取りつきはクサコバという、尾根右側のルンゼを予定していたが、こんなに雪が積もるとは思わなかったので、多少心配するが、とりあえず行ってみる。林道の除雪が切れたところに、ひざくらいのラッセルになる。クサコバを見上げると、上部が急な雪壁でいやな感じだ。弱層テストをしてみると、案の定すっぱり切れる。が、アイゼンに履き替え登り始める。下のほうはクラスト気味だったが、上部はラッセルで、膝くらいになってくる。中間部あたりまで来たとき、上のほうから、雪面が崩れてきた。上部にいた長岡、山田の二人はその通り道にいたため、心配したが、まったくよける心配がない。僕が左の灌木荷よけて崩壊を見ていると、50m ほど下で、立派なデブリになっている。雪崩です。上の二人は大丈夫だったらしい。落ち着かせるために、左の灌木の下に移動するように指示し、休憩にする。山田選手になんでよけなかったか聞くと、のまれたら泳げばいいと思ってました、とのたまう。長岡は山田が動かないので動揺したらしい。まったく中途半端な知識は恐ろしいと思うが、まったく動じていない山田も恐ろしい。とにかく無事で良かった。前日の積雪、弱層テスト、スノーボール等々、予兆があっただけに、セオリー通りの雪崩発生に、わけもなく感心。ひとまず、空身でのラッセルで、長岡が先行することにした。その後もスノーボールの落下はあったが、ラッセルを繰り返して、ようやく、P3、P4 間のコルに抜け出る。上部はかなり傾斜があった。今日は僕の卒業発表のはずなの

で、携帯で電話するが誰にもつながらずちょっと心配。

P4 の登りはルンゼから、上部は急傾斜になり、先頭の長岡が苦勞していた。早速フィックスが張ってあったが、ノーロープ、そこから雪稜になり、きのこで行き詰まる。右手にクライムダウンをはじめると、途中からあるはずの地面がなくなり、ずるずると落ち始め止まるはずが止まらない。気がつく、5メートルほどの落とし穴状のシュルンドの中にひっかかっていた。頭をぶつけ、ひざをひねったが、奇跡的にそれほどのダメージがない。上の人間を呼ぶが、離れていたためか聞こえない。しゃあないかと、登り始めるが、30キロ以上の荷物を背負ったままのバックアンドニーのチムニー登りに、アックスをかませ、訳がわからず登っているのに、恐らくまったく報われないであろうことは訳がわかる。ようやく這いあがると、長岡に記念撮影され、とにかく、そのまま穴の所からクライムダウン、トラバースをし、コルに下り立つ。頭から血がでていて、サングラスなくす。山田を長岡に確保させて下ろし、長岡は落とし穴の左を回って下りてきた。この事件は「消えた宗像事件」と名づけられた。ここから、ワカンに履き替え、樹林帯のラッセルから、徐々に尾根が広くなり、穴毛槍の手前へ。休憩していると、驚いたことに後続パーティーがいる。まさか、この尾根で他パーティーがいようとは。時間も遅いので、穴毛槍の頂上直下に泊まることにする。設営しているとさっきの二人組が抜いていった。末端から取りついたこのパーティーは、わらじの仲間の仲間であることが後にわかった。夜、とりあえず、長岡、宗像で、山田少年の好きな女性のタイプを質問攻めにする。1年一人だとからかいがあるが、この図式は最後まで変わらなかった。しょっぱなからいろいろあった1日だった。

19日 (曇りのち雪)

4:00 起床～6:10TS～6:30 穴毛槍～8:30C6～10:10P7 (プラトー) ～11:00C9 (南壁のコル)
底部から (トラバース Fix 工作) ～12:45 コル底部 TS

夜、非常に息苦しい夢を見た気がしたが、朝起きると、上部雪面にひびがはいっていた。穴毛槍を越えたところにわらじがテントを張っていた。そこからやせ尾根、きのこになっているので、長岡リードで30m フィックス。山田を通過させるが、きのこを越えたところでおちたらしい。向こうからは、長岡、山田の、「登れ！」とか「動けません」とか「スリングをナイフで切れ」とか緊迫したやり取りが聞こえてくるが、こちらからは見えないので、わらじの人と「落ちたみたいなんで時間かかりますよー」、「そりゃあ大変だなあ」とか、気の抜けた会話を試みる。その後もう1p ナイフリッジ、それからやさしい雪稜でC6へ。そこから宗像リードで雪壁を左から越え、リッジに出る。山田が赤旗が引っかかって苦勞していたが、登って来るのを見ると、ユマールと体が連結されていない。落ちなくて良かった。と啞然とするが、これは長岡の管理ミス。まったく、今日もいろいろある。わらじの人と休んでいて、山田が篠竹引っかかったのを「1年のうちは苦勞したほうがいいんだ」とか、理不尽な説明をしていると、わらじの人に「極道ですね」とか言われてしまった。一橋では篠竹だけは1年が持つときまっているが、今回の合宿でも、結局1本も使わなかった。リッジ

は未だ細いが、空身でトレースをつけにいて、ノーロープでプラトーまで。右手に当初登ろうと考えていた東南壁が見えるが、今回は対象から外したのでさっさと進む。南壁の手前で 2P フィックス。まだ、昼過ぎだったので、今日中に南壁を越えることを主張するが、長岡が渋る。とりあえず、トラバース 2P でルンゼまでくるが、わらじが先行しているし、天気も下り坂、また、早く来すぎて荷物も重いので、さっきのコルまでフィックスをし直して戻る。山田にフィックスをさせてみる。このコルは狭いし、壁の下なのであんまり気分は良くない。

夜、明日の登攀に備えて、多すぎる荷物を減らすため、ポップコーンを作り、植木鉢の土くらいあるココアを消費し、とにかく軽くする。いらんもの多すぎ。カンテンパパが皇居の周りをは走っていないので、パオパオ杏仁を説明するとおおうけしていた。すでにこの時点で、宗像はあすの天候をまったく無視して、明日中に下山できる、という大本営発表をし、みな
の戦意昂揚をはかるが、「笠なんてただの山だろう」という発言は、これまでの経験からして問題発言だった。

テントラッセルして寝る。

20 日（雪後晴れ）

6:25 起床～8:25TS～10:30 ルンゼ底部から 3:00 南壁のコルの頭～17:00 杓子平 (2600m 付近の TS)

夜中、長岡、山田がテントラッセルに出動し、次は自分の番だったのでふて寝をきめこんでいると、大幅に寝過ごし、昨日の自分の夢はもろくも崩れ去ってしまった。積雪は 50cm くらい。トラバースのラッセルで長岡が、がらがら雪崩を起こし、僕も雪崩を起こすが、気づかなかったことにする。ルンゼに下りるところで、山田選手が、懸垂が動かなくなりまっ
ている。フィックスを張りすぎた自分の落ち度だが、動かないからいらいらする自分はかなりひどい奴だったらしい。2p のフィックス通過に 2 時間かかってしまった。そこから、長岡リードで雪壁からルンゼ状 30m 程。山田が苦勞している。核心部で、山田の落氷で唇を切ったところで、ユマールに雪がつまって効かなくなり、踏んだりけったりだが、とにかくクリア。ルンゼの傾斜が強くなっているところから、次のピッチは、左へトラバースする。宗像は「消えた宗像事件」でひざをいためていたので、また長岡に行っても

らう。トラバースを終えると、あとは灌木のあるやさしい草つき登りだった。40m でラッセルになり登攀は終了するが、こちら側からルンゼを見た限りでは、こっちのほうが楽そうだった。しかし、ここの残置はやたらめったらあって、うっとうしい。テルモスを飲むが、脂肪分が分離しているらしく、酸っぱくて人気がない。天気も良くなってきた中をひたすらラッセルを繰り返し、抜戸を目指す。朝からほとんど食べていなかったのも、山田、長岡が先行しているすきに、誰も飲まないココアを全部捨て、レーションを食べ、水を飲み、一息つく。最初は、抜戸の手前くらいまで行けるだろうとか、景気のいいこと言っていたが、「あそこの雪面でいいんじゃない」とか、しまいには「この辺でどう」とか、弱気になり、抜戸

の 200m ほど下に泊まる。5 時まで行動。穂高の山々が良く見える。ここまでくると、引き返せないで、卒業が気になるが、何ともならない。

夜、山田少年に、百名山は、穂高だったら、奥、北、西全部、笠だったら、緑の笠も登んないと登ったことにならない、とかいいかげんな事を説明してみる。さすがに信じてはいなかった。予定より 1 日早い、明日こそ絶対下りる、と発表。12 日分の食糧を用意して、何でそんな急ぐのか、という目で、本日楽勝だったとのたまう山田少年が訴えかけるが、僕は雪山の場合、山に入った瞬間から、早く下りたいので、明日は頑張ろう。

最近手を出した 16 歳女子高生と、長岡がセクハラを受けたと主張する 28 歳の OL に長岡が果敢に携帯での連絡を試みるが、ひとまず通じず、穂高と笠は、かろうじて月夜に山の権威を維持していたようだ。

21 日（晴れのち曇り）

4:00 起床～6:00TS～7:50 抜戸岳～10:20 笠が岳～13:40 クリヤの頭～18:00 新穂高温泉
朝、山田がスパッツが見つからないとか騒いでいたが、シュラフの中から出てきた。無視して一人で早速空身ラッセル。結構朝一でこたえる。山田にラッセルを代わるが、50m ほどですぐに交代している。あとで山田は 10 分やりました、とか言っていたが、長岡、宗像に「時間じゃねんだよ」とか「止まってても 10 分たつわ」と突っ込まれ、こういうときの一人しかいない 1 年生は目も当てられない。抜戸の雪庇を長岡が切り崩し、稜線上はクラストしているので、アイゼンをつける。途中、時々潜りもするが、おおむね快適な稜線散歩で笠下のコル手前まで。休憩しようとしたら、長岡がいない。山田に聞くと用足しに行っているらしい。5 分待ち、10 分経ち、25 分経っても現れないので、いらいらするとともに、さすがに心配なので、見に行こうとしたら、ようやく現れた。むちゃくちゃ不機嫌になり、鹿とを決め込み、後ろを振り向かずに、笠が岳まで、一時間歩きとおした。さすがに大人げないので、とりあえず「おまえ今日一日トイレ禁止」と理不尽なリーダー命令を言い渡し、下山にかかることとする。3 年越しの笠の頂上は、あっさりしたものだった。広サコ尾根と南西尾根のジャンクションで、長岡が案の定間違えて、50m ほど登り返す。ここの斜面もいやな斜面で、雪崩れそう。クリヤの頭の手前は再びラッセルになり、いいかげんいやになってくる。クリヤの頭からのくぐりはさらにいやな感じで、弱層テストをすると、スパッとキれる。後ろ向きで慎重に下り、山田に、本来だったら、もう少し慎重に、ロープだすなり、時間待つなりしたほうがいと、言い含めるが、今回、そういう説明が多すぎる。大概が、何が本来なのか、行動が伴わなければ、まったく説得力がない。その後、一箇所、急な個所をクライムダウンし、くだりのラッセルを繰り返す。宗像、長岡には、一の沢がとっても魅力的に見える。とりあえず飛驒沢シンドローム（雪崩の危険があるにもかかわらず、下りやすそうな谷筋を下山路に選ぶこと、またはその衝動。注＝やってはいけない）と呼ぶことにする。一応、予定どおり東北支稜を目指す。今回、大体、この尾根が東北支稜だろう、と地図上で見当をつけていたが、この辺の尾根ならどれでも下れるだろう、と思って、あまり確

信は持っていなかった。休憩して見ると、目の前の尾根はきのこで始まっていて、ほんとかいな、という感じで、その手前の一の沢側の尾根のほうが下りやすそうであった。誰かの手袋が落ちていったが、全員自分のではないと言い張るので、見なかったことにする。予定どおりの尾根を下ることにする。が、予想通りきのこが連続し、先頭の長岡はきのこの根元によく落ちこちていた。その上、途中、尾根を外し、登り返す。本日、あまり長岡君は精彩がない。長岡が落ちるのを学習して、きのこは滑って、穴にはまる前に足を出すと、何とかうまく着地できる。その後も、急なくだりが続き、山田は途中で案の定、滑落していた。それにしても、さっき見えた隣の尾根は下りやすそうで、あれが東北支稜じゃないのか、と考えると、尾根が広くなり、そのまま、隣の谷へと歩きやすそうなスロープが続いている。こんだけがんばったんだからもういいやろ、とか、かってな理由を自分につけて、谷へ。そのまま、堰堤につき、ようやく林道に戻ってきた。今までたどってきたところが一望できる。今日はほんとにぐるっと回って良く歩いた。

時間も遅いので、新穂高では再びトイレに泊まった。最後の合宿としては物足りないとか、長岡が言っていたが、事故がなくて良かった。懸案の笠に登れてうれしいが、卒業もできていたので、とりあえず良かった。それから、山田も大雑把な奴で良かった。

夜、長岡は 16 歳女子高生に連絡が取れたらしく、終始ご機嫌であった。青少年保護育成条例に対する恐怖感はどうやら吹っ切れたらしい。

(感想) 小さな達成感が欲しかった。勝率が異様に下がっていた。今回の登山は、失敗や反省点がいろいろあったが、総じて楽しいものだった。総合的な面白さではなく、単純に楽しかった。この山に登るためにはどうするべきかと考えるとき、その時点で自分の中ではメンバーの選択が始まっている。そうではなく、こういう奴と山に登りたい、というときもあって、長岡や山田はその意味では全く気楽な奴らだった。どちらに比重を置くかはいろいろあるが、今回無事に帰ってこれたことで、僕の中では小さな喜びだった。こういう登山も大事にしていきたいと思う。 文責：宗像充

12. <その他の山行>

- 10/3 双子山 宗像/太田 (上智大学山岳部 OB)・遠藤 (上智大学山岳部 4 年)
- 10/? 川又の岩場 宗像/栗谷川 (法政大学山岳部 5 年)
- 11/23 広沢寺 宗像・田中・山田
- 2/11 川又の岩場 宗像・山田/太田 (上智大学山岳部 OB)
- 2/11・12 飯縄山 (スキー) 山田/古瀬 OB
- 3/25 湯河原幕岩 宗像/太田 (上智大学山岳部 OB)、相原 (法政大学山岳部 5 年)
田代 (学習院大学山岳部 4 年)、内野 (同 2 年)、佐藤 (成蹊大学山岳部 3 年)
- 3/30 川又の岩場 宗像/太田 (上智大学山岳部 OB)、相原 (法政大学山岳部 5 年)

- 松本（日本大学山岳部 5 年）・鳥居（同 1 年）・渡邊（早稲田大学山岳部 2 年）
- 4/2 川又の岩場 宗像・山田/相原（法政大学山岳部 5 年）、内野（法政大学山岳部 2 年）
- 2/? 湯河原幕岩 宗像/太田（上智大学山岳部 OB）

13. <中止になった山行たち>

10 月 丹沢の縦走（山田・田中の予定）

八ヶ岳の縦走（山田・田中の予定） 天気が悪かったため。

12 月 冬合宿・抜戸岳南尾根～広サコ尾根（一橋山岳部、完成学院大学山岳部の予定）

この合宿は、僕の卒論の提出が 1 月 7 日だったため、まことに勝手ながら中止いたしました。直前まで、雪上訓練を組むなど準備を進めましたが、なにぶんにも僕の能力不足により、関西学院大学山岳部の 2 人の仲間をはじめ 1 年の山田に大変な迷惑をかけ、申し開きのしようがありません。僕自身も前々から計画を進めていた山行であり、何とか実現したいと思っていましたが、卒論の追い込みにより、余裕がまったくなくなり、このような心の余裕がないところにリーダーとして他のメンバーを連れて合宿に向かう気にはなりません。また、リスクも高いものと判断いたしました。僕は、キャンセルしたら、関西学院大学山岳部の奴隷になる、と宣言しておりましたので、事実、その後八ヶ岳にいっしょに行かせていただきました。しかし、これにより、取り繕われたとは思っていません。僕にとっても、冬合宿が中止になるなど初めての経験であり、これが今後良くない前例として、後輩に語り継がれるであろうことは心配していますが、事実、悪しき前例ではあるので、申し開きはいたしません。重ね重ね、このような事態を招いたことに、関係者の皆様にはこの場を借りまして、お詫び申し上げます。

文責：宗像充

～新人紹介～

Alimaa Zorig（経済学部 2 年）

モンゴル、ウランバートル出身の 21 歳の留学生。日本に来て今年で 3 年目だが、かなり日本語は話せる。Alimaa Zorig（アリマ＝ゾリグ）は Alimaa が苗字で Zorig が名前で、苗字で呼ばれるのは嫌らしい。去年は田中氏の落石事故にビビって山岳部入部を断念した経緯があるそうで、去年の事故はここにも影響を及ぼしているようだ。

いろいろなことに興味があるらしいが、トレーニングと勉強は嫌い？とりあえず沢とフリーのゲレンデに行ったが、フリーは鷹取に行ってしまったため、今のところ沢登りの方がお気に入りの方だ。身のこなし方がとても軽快でかなり有望だが、なぜかもう少し体重を増やしたがるのは肥満の私には理解できない。

【フリートーク】

『山岳部 「共同体論」、「機関論」を超えて—あるいは「ヘボのレクリエーション」と「すごみのあるレジャー」と』
宗像 充

いくつかの死がある。

松岡誠司、榊原、横山、そして吉尾弘。

松岡誠司のウルタルⅡの壮絶な記録を見たとき、あいもかわらず自分の山の登り方がわからずに四苦八苦していた自分は、ああ、こんなこともできるんだ、と単純に感動すると同時に、そのストレートな登り方が自分がやりたいことなんじゃないかと思った。そして 25 にしてウルタルの頂に立った彼を、うらやましく思い、負けたくもなかった。『さくっと登ってきますよ』という悔しいくらいに爽快な言葉とウルタルの記録を残し、しかし、彼は翌年レデイスフィンガーに散った。そういつて山に向かい、何事もなかったように帰ってこれたらどんなにいいことか。

考えながら自分の経験を少しずつ積んでいった自分も、それは山岳部の枠の中でやってきたことで、すくなくその組織に支えてもらっていた。まだ、その枠から外れて登るほど強くもなかったし、今もこだわってはいない。そんな自分が 4 年の時、成蹊の榊原の死に出会い、悲しい思いをした。山岳部という問題の多い組織のなかで、彼はまだ 2 年生なのに、僕が 2 年だったときよりずっと前向きで、甘えることもなく、上級生のいない山岳部を切り盛りしているようで、がんばって欲しかった。山の死が特別なものでもなんでもないということがわかっていても、涙を流している自分がいた。

昨年末、富士山の佐藤小屋であった上智の横山は、一度山岳部を離れ、また登りたくなくてクラブに戻ってきた変り種だった。学年は僕と同じなのに、山岳部歴はずっと下だから、クラブでも居場所が決めにくく、学生部でもあまりなじめなかったみたいだが、いいかげんな僕とは良く話した。「気をつけて」といって佐藤小屋の下で遠藤たち上智の連中と別れたが、その日の夜、馬返しから駅に向かう途中で横山が車にはねられてなくなった、という知らせを、翌日上智の遠藤から聞いた。あまりの突然のことに「どういうことだ」と問い詰めても、取り返しのつきようもない。人間はいつかは死ぬんだという当たり前の真実をかみ締めてみても、納得できようはずもなく、しかしそれをうわべだけでもわかったつもりになって、それでも山に向かうであろう自分の内面の浅薄さを思い知る。

そうやって、この先も山に登り続けるであろう自分にとって、時折山の雑誌で見かける、吉尾弘氏は、こういうふうになんか年をとっていきたくない、と思わせるに十分な充実した登り方をしているように見えた。僕の甥っ子が同じゼミテンだったこともあり、妙に親近感も感じていたが、その彼も今年の三月、滝沢リッジで帰らぬ人となった。今年、同じルートを考えていたこともあり、あの年で滝沢リッジに登ろうとすることも驚きだが、それ以上に、結局、あ

の年まで生きて山で死ぬということは、どういうことか。僕にとっては、昔たいそう登っていても、ボナッティーやメスナーのようにのぼらなくなってからも偉そうなことをいうより、吉尾氏のように、自分もしっかり登っていて、それでまわりに気配りできる人間のほうがずっと信頼がおけるはずだと思えた。自分はおっちょこちょいだから、年をとってもクライミングに精を出していると、取り返しのつかないことになるんだらうな、と考えてても、吉尾弘も登っているし、という説得力は自分の中ではもうないのか、それとも、彼の死もいくつかの死のたまたまひとつにすぎないのか。自分の山の登り方をそうやってまた振り返る機会を持った。多少、こういう死の一つ一つもいつかは自分の中で小さな思い出のひとつとなり、たまにしか思い出すこともなくなるのだらう。忘れることは死者への冒瀆ではなく、人間が生きていくための本能でもあるのだらう……合掌。

山岳部を続けていて、残念だったことがひとつある。結局、信頼のおけるパートナーは部内では見つけることができなかつたし、勢い僕の登り方は、山そのものに専念せざるを得なかつた。それは、山岳部員としては当然のことであるのかもしれないが、余裕のなさは常に付きまとい、そのため合宿はどこかやっつけ仕事の心持が自分の中にあつた。「山岳部共同体説」（合宿を組んで共同で実行すること自体が目標）、「機関説」（合宿は訓練の場、個人山行でやりたいことをやる）という、いかにも議論好きの一橋生がしそうな論争が10年以上前の一橋山岳部で流行つたらしい。さてさて、こんな議論ができること自体、人数のいない今の山岳部では考えられないが、結局、僕が山岳部でまなんだことといえば、自分で山に関して目標ややることを決め、そして、その結果とプロセスについて、自分で責任を負い、反省が求められることだという、当たり前のことであつた気がする。こんなことは、世の中すべてのことに当てはまる、といわれるかもしれないが、山に限定して言えば、突き詰めるとそこに自分が死ぬことまで入っているから結構重い。確かに、人が傷つけば、誰かに責任があるのであり、そういった法的な関係を問うていくと、行き詰まる。重要なのは、人が傷ついたり、死んだりすることは山ではある、ということであり、そういう事態に自分や自分の仲間が陥つた場合、逃げずに対処するという事実ではないか。甘えるわけではないが、そういうとき、その事態を自分のことのように感じてくれ、助けてくれるのだらうと思える人間がいることが心強く、そのような結びつきが生じるのは、山の場合は同じ目標に向かつて、いっしょに取り組んだ経験がある場合にもっと強くなる。全員で、同じ目標に向かつて取り組めれば、それが一番いい。「共同体」であろうが「機関」であろうがそれは同じだ。しかし、結局、僕にはこの前提としての人間が部内に少なかつたし、また、結局のところ、登山が個人に属するということがわかつてきた。

「登山は個人に属する、登山は遊びだ」、と叫ばれて久しい。それだけ登山という行為が個人のもので遊びでもなかつた証左だ。近代登山史の終焉、歴史からの離陸によって、結果的にはあるが、その叫びは昨今ようやく実現を見たように思う。（柏瀬裕之『大享時代がやってきた』山と溪谷 777号）全面的に賛成。「無事完登したからといって、かつてのような『榮譽』が得られるわけでも、まして人類史的、登山史的意義があるわけでもない。もっ

といえはこうした登攀を積み重ねて行ったその先に、クライマーとしての究極の栄冠が待ち受けていることも今はない。」(同上) その通り。かつて、この部でもはやったポラーメソッドで目指す頂の先にはロマンがあったかもしれない。しかし、そのような「大将取りゲーム」は今では成り立たない。トモ=チェンセンがローツェ南壁を陥し(たはず)、ロシア人がフィックスベた張りでマカルー西壁を手中に収め、残り香のように、松岡誠司がウルタルⅡから帰って来た時点で、もう、みんなで目指すものはなくなりました。ガンケルプンズムはブータン政府が機嫌を直せばすぐに登られるでしょう。「かりに今後これまで以上に瞠目すべき登攀が行われようと、世間の評価は多分『スタントマンの冒険』程度をこえることはな」(同上) さそうだ。昔を懐かしがるのはやめましょう。いやいや、懐かしがるのは大いに結構だが、それは想像力のなさを露呈しているだけなのです。いくら懐かしがっても、やってることはみんな中垣大作氏曰く「ヘボのレクリエーション」(『ランナウト』第4号)なのです。おれのやってることはそんなこっちゃない? 服部文祥は登山を「レクリエーション」と「(クライミングという) 思想を求める行為」に分けるが、(『GW とは何ですか』「岳人」635号)、確かに戸高雅史氏のように神懸かった文章を書けるならそれもわかる。それでも端から見れば、せいぜい「すごみのあるレジャー」にすぎないんじゃないですか。中垣大作氏はクライミングの進化と言う視点から、伊藤達夫氏を酷評する。どんな分野でも、少しずつ限界を押し上げようとするパイオニアがいることも認めましょう。しかし、結局、やってることはどっちも「すごみのあるレジャー」と僕には見える。ここからはじめましょう。肩肘張るのはよしましょう。

皆が求めるロマンはなくなりました。「ところがゲームが決着し登山が個人の遊びに帰したとたん、視野は呪縛をとかれたようにヨコへ広がり、未知未踏の山々や岩塊を、面として、あるがままに展望しはじめる。初体験ゾーンが一気に拡大するわけである。」

そういう中で、「大将取りゲーム」の前線から徐々に後退し、せいぜいやっていることは、シリーズもののロールプレイングゲームで、今はマイナーリーグ以外の何物でもない大学山岳部に山岳界の期待をかけるのもやめましょう。山好きの人がくればそれでいいじゃないですか。そうじゃない人もいますが、登山は所詮 **all or nothing** の問題ではなく、**one of them** なのです。うーん、そんなに単純か。関学の長岡が「山岳部のリーダーってババ抜きのパパだよな」とか僕に言ってくる。納得。早く次に渡したい、なのになかなか渡せなくて。時々戻ってきたりして。それでも山岳部というわけのわからんものの中でがんばってきた僕らは一体なんなんでしょう。残った奴をよーく観察してみる。きっかけはわからない。山が好きで奴もいる。それより多いのは自分がかわいい奴かもしれない。自分で自分が負けるのを認めたくなくて、意地張ってる奴がここにもあそこにも。結局、僕は一橋山岳部の中で仲間を得ることに苦労したが、今は他の大学に仲間がたくさんいる。これも山岳部に入ったおかげといえはその通り。人数は減っても、山岳部の人間は昔も今も似たような種類が多いんじゃないですか。単純なくせに、組織に悩まされながらも、それでも意地張って山続けて。これから先は、人数が少ないのはなかなか克服されそうにないと思う。それがノーマルな状

態なのです。残った奴は、それでも意地張ってがんばってるんだけど、困ってる。助けてください、というのにも意地を張る奴が多いでしょう。そういうときは、助けてやってください。もう、仲間が死んだり怪我をするのを見るのはたくさんです。

僕自身は、「へボのレクレーション」というのがわかった上で、それでもせいぜい「すごみのあるレジャー」くらいのこと言ってみたい。いつもいつも真剣勝負では身が持ちそうになく。息抜きの山登りも好きではある。それでも、より困難なことができるということは、それができないことよりも何倍も面白いということも十分経験済みでもある。意味がなくてもいいのです。刹那的に登りたい。

小谷部全助のいう「或るものはかかる立派な岩壁の幾つかが、なお未踏のまま残されていたのを知ってか知らずか、早くもバリエーションルートに見切りをつけて本邦登山界の行詰りを論じ、遠征熱にうかされている。」「しかしながら行詰りということは、山岳界というような大きな観点から眺めた場合に初めて通用するもので、これを個別的に解し、若い我々が激しい登攀への精進を怠り遠征の名に隠れて安逸を貪る如き卑怯な態度を取らぬよう注意すべきである」(『針葉樹』第9号)という言葉、華やいた宴の後のこの時代、65年後の今でも、僕にとってはリアルな負け惜しみにしても耳の痛い言葉である。

「ぼくは決心した。山を下りることになるだろう。だが、谷間にとどまるかどうかははっきりしない。というのもあの山の上で、べつの広大な地平線を見とどけたからだ。」(W.ボナッティ『大いなる山の日々』) と言えりほどにも、どうやら僕は大人になったわけでもなさそうだ。

僕は松岡誠司がウルタルに登った25になる。どうやら僕にも金はなさそうだ。想像力をはたらかせて、何ができるか考えたい。できれば「サクッと登ってき」たい。アルピニズムって何ですか。そんなこと、まじめに考えたこともない。

一橋山岳部の郵便番号は 186-0004 よ

～編集後記～

なにぶんにも多い。99年度上半期報告書はたった13ページで終わったのとは対照的に、下半期報告書はその3倍ほどもある。でも、編集者は昔と違ってちゃんと清書してくるのをまとめているわけだし3時間もあればできる仕事だが、暇な私の時間つぶしに丁度よかったが。

それにしても、この報告書の約80%超は宗像氏の原稿である。特にフリートークなんかは長い長すぎる。でもこれだけ分量が多いということは特にXX以降は毎週どこか行っている。まったくすごいことだと思う。読んでみるといろいろなことがあったみたいで、必ずしもこうなりたいとは思わないが・・・。

と書いたところで、2つの疑問。この報告書全部一字一字完読した人はいるだろうか？そして、はたして次の報告書はどれくらいの分量になるのだろうか。

～完～

ありがとうございました。